

## 佐藤春夫と中国の短篇白話小説集『三言』

——「李太白」の小説創作をめぐる

黄 幼 欣

はじめに

佐藤春夫の全短篇小説の中で「李太白」はどのように位置付けられているのだろうか。作者の「支那趣味愛好者」<sup>1</sup>としての特色は、この作品に濃く見られるが、第二流のものと見る者もいれば、この一篇を愛好し、熱心に研究する者もいる。

話の粗筋はこうである。

天上界から謫仙された李太白が時の天子の寵愛を一身に受けながら、一時宮廷詩人として皇帝に仕え、高力士に靴を脱がさせたり、楊国忠に墨を磨らせたりした。やがてその不羈放埒のため宮廷から追放され、永王璘の挙兵に巻き添えになって友人の奔走で赦された。それから酒と詩と月とをいっそう愛するようになって、ついに石江の牛渚磯で、水中の月をとらえようとして誤って舟から水中に落ち

た。落ちたところは、仙人の酒を醸す河であり、「金絲魚」という魚になった李太白は、海上の仙人、安期生に呼び止められ、その酒の河を遡れば天界まで泳いでいけると教えられた。そうしてかつて賀知章のために酒に換えた「金龜」の水先案内で李太白は天界に戻っていく。

一見タネがありそうに見えるが、「李太白」小説創作をめぐる不明な点は未だに多い。一方、春夫自身の「李太白」に対する思いはどうなのだろうか。自作中の一級品に数えなかったと思いきや、不意にその作に対する深い念を吐露する（表1）。本論において、それらに照準を定め、究明していきたいと思う。なお今回は「李太白」創作当時の大正文壇背景について深入りしないことにする。稿を改めて述べたいと思う。

表1 佐藤春夫の「李太白」言及

掲載年月	「李太白」言及作品名	「李太白」言及部分（抜粋）
1918年12月	「叙事散文詩的の作品」（『新潮』第29巻第6号「本年発表せる創作に就て一三五作家の感想一」）	私は私の今までの作品が、人々から無理解に罵られる時には、それに対して正当な弁護も出来ます。（筆者註：本文は「李太白」についての言及は見当たらないが、掲載年月から考えて、とりあえずこの表に入れることにする。）
1919年1月	「アントニオのやうなセンチメンタリズムから生まれた「田園の憂鬱」（『新潮』第30巻第1号「出世作を出すまで」）	さうして、新しく出来た「李太白」の構想を話して、それを書いて見ることにした。谷崎君はその構想には非常に賛成であつたが、出来上つたものを見て、幾らか不満だつた。しかし、まだ好いものとして、それを「中央公論」へ発表するやうに世話をしてくれた。
1923年8月	『玉簪花』自序（新潮社）	私は数年前から支那の古譚に材をとつて、その製作が自然と集まつたら、東南第一花と自負した玉簪花を出さうと思つてゐた。私の創作「李太白」「星」は、私が最初に企てた玉簪花のうちのものである。
1925年12月	「瀧田君に関する私記」（『中央公論』第40年第13号「瀧田樗陰追憶記」）	後三四年、僕、終に為す有るなく君が知遇の言を空しくせり。この間に、僕、偶、谷崎潤一郎と相知り、彼が熱情ある鞭撻によりて、僕は將に破却せんとせる僕のペンを敢て捨てざるを得たり。僕二十六歳の四月、拙作「李太白」成る。これを谷崎に示すに、彼はこれ好しとし発表に就て君に謀らんとす。
1928年9月	「自作に就て年少の読者の為めに」（『文章倶楽部』第13巻第9号「自作自註」）	私が『李太白』を書いた時に、或る匿名の批評家が支那小説の翻譯に過ぎないと知つたかぶりを言つてゐましたが、私の『李太白』と同じやうな支那小説があつたら、読ませてもらひたいものだと言ひたいのです。『李太白』は不手際な大人の童話で、出来そこなつた神仙譚ですが、全然私の創作に違ひありません。
1935年10月	「（『中央公論』）」（『中央公論』第50巻第10号）	御誌の五月号に谷崎の紹介で創作李太白（五十枚ほどの空想小説、伝説によつてゐるが純然たる創作だのに支那小説の翻案と評した月評子もゐたつけ）の採用されたのが御誌のと小生との因縁の結ばれたはじめでありました（尤も読者としては反省雑誌の頃から見てゐましたし、李太白持ち込みの二三年前にも一二度人物評論の短文を書いたことはありましたが）。創作は李太白がはじめてつづいて同じ年の夏期増刊号に探偵小説風の趣のあるものをといふお求めによつて「指紋」を執筆しました。
1936年9月	「追憶の「田園」」（『新潮』第33巻第9号）	さうして書き直す代りに李太白をもう一篇書いた。これは二月の下旬に出来た。当時の自分のつもりでは李太白の方がすらすらと出来たやうな氣であつた。
1941年10月18日	「からの因縁一支那雑記の序として」（『支那雑記』、大道書房）	さうしてこの塵は自分の文学の生涯のふり出しに「李太白」を書いて支那小説の翻案と誤り伝えられて以来今日までの三十年の間、さうしてこの後も自分が書を読み、筆を執り得る限りは全生涯なほも積りつづけて行くらしい。
1956年11月1日	「述懐その折々（その二）」（河出書房刊『自選 佐藤春夫全集』第2巻「自選春夫全集 月報」其の二）	わたくしがはじめて中央公論に「李太白」を出した時、一新聞の新作紹介のやうなコミ欄の一匿名子が拙作を支那小説の翻譯だとか翻案だとか書いてゐたのを見て以来、わたくしはすっかり批評家といふもののデタラメを知つて以来、それを馬耳東風、齒牙にかけない洗礼を受けると同時に、これではならないと、頼まれさへすればわたくしも批評の筆を執るやうになつたものであつた。
1962年12月	「あのころの私と交友」（『芸芸朝日』第1巻第8号）	筆者註：全篇は「李太白」創作に関する回想文である。

筆者註：「李太白」発表年月日は1918年7月、掲載誌は『中央公論』第33巻第7号。

# 一 ポエジーが溢れんばかりの創作童話「李太白」

大正七年七月、佐藤春夫は谷崎潤一郎の紹介で、当時の文壇の桧舞台だった『中央公論』（第三三巻第七号）に「李太白」を発表した。この作品は、A fairy taleという副題そのままに、李太白伝説のメルヘンを詩情豊かに描こうとしたものといえよう。春夫の浪漫的な資質と、彼の主張である「しゃべるように書く」文体が、この作品において、花開いたといつてよいかもしれない。

当時『中央公論』の担当編集者は、新人発掘の名手ともいわれた瀧田樗陰であった。彼は「李太白」の原稿を一枚一枚丁寧に裏打ちし、きれいに製本して藍色の帙に納めて、さらに題簽に「李太白佐藤春夫自筆原稿」とものものしく書き、大切に保存していたという。昭和三十七年、この原稿を古書展で入手した者がすぐさまそれを作者に見せた。往時を思い返し、「あのころの私と交友」という回想文の中で、春夫は「そうして他も我もあれを忘れ去らないのは、やはりあれに、ともかくも一種の力作らしい意気込みがあるためかも知れない」と述懐している。

漢詩を和訳しようという志はすでに「李太白」執筆当時から春夫にはあった。芥川龍之介は、新進作家となった春夫の作品に早くも作者の詩人としての資質を見出し、大正八年六月号『新潮』誌に掲載した「何よりも先に詩人」において、次のように春夫を評してい

た。

佐藤春夫は詩人なり、何よりも先に詩人なり、あるいは誰よりも先に、と言えるかも知れず。（中略）されば作品の特色も、その詩的な點にあり。詩を求めずして佐藤の作品を読むものは、なほ南瓜を食はんとして、こんにやくを買ふが如し。（中略）佐藤の詩情は最も世に言う世紀末の詩情に近きがごとし。繊婉にしてよく幽渺たる趣を兼ね。

これが今日春夫文学に対する定説のようになっていく。一方、「李太白」は、春夫のいわゆる「支那趣味」を濃厚に示す作品であるとともに、作者のペダントリイ趣味を満足させるものでもある。この作品には、難しい語句や中国の詩がたくさん盛り込まれており、解説に手間取るにもかかわらず、昭和中期に入ってから、なお少女向けの読物として度々取り上げられている。文壇老大家だった春夫を和漢混淆文の無二の名手として当時の青少年読者に紹介しようとする意図も、おおよそ出版社にはあったろう。

昭和三十一年、あかね書房より『少年少女日本文学選集』が出版され、そして同年度の日本全国学校図書館協議会推薦図書となった。その第十六巻が『佐藤春夫名作集』（高見順編、十二月刊行）であった。巻末に「解説」として、石森延男氏が「作品の読みかた」とい

う欄において、収録された「李太白」を、「おとぎばなし、妖精物語で、伝記ではありません」と紹介した。青少年読者に、

こういうむずかしい語句の多い文章は、むずかしい語句はそのままにして、さきへさきへ読み進みます。けれども、前後の文脈をはずかたどっていくと、そのわからない語句もだんだん理解されてきます。

と解説し、いわゆる「あて読み」を勧めたのである。この作品を通して、当時の若い読者は、春夫文学のオリジナリティ、詩人としての作家像をも窺い知ることができたであろう。

あかね書房刊『少年少女日本文学選集』の次は、ポプラ社から『新日本少年少女文学全集』（志賀直哉・武者小路ほか監修）第十四巻として、『佐藤春夫集』が出版された（昭和三十三・十二）。春夫が自選した十四篇の短篇の中に「李太白」が再び現れている。その「まえがき」において、収録された諸短篇作品に対して、作者は次のように語っている。

すこしわかりにくいことや、おもしろくないのも、きつとあることとは思いますが、これを読んで読者の品性をわるくするという心配だけは、まあ、ないものと自信をもっている。

「わかりにくい」ものはいうまでもなく特に「李太白」を指しているだろう。その後、講談社刊『少年少女日本文学全集』第六巻「佐藤春夫・室生犀星・川端康成・吉田紘二郎」（阿部知二ほか編、昭和三十八・二）にも「李太白」が収められている。

「李太白」は、作者のいわゆる「空想趣味時代」に、相当の芸術的情熱をもって「おとなのお伽ばなし」というつもりで書き上げられたので、前述したように、昭和中期に入ると、この作品は、創作童話という風に若い読者に紹介される（表2）。作者の意図によって、決して「百花村物語」などのように『玉簪花』や『支那童話集』の範疇に属す翻訳小説の類いではない。『玉簪花』は中国の通俗小説を集めた短篇翻訳集であり、その成立について、春夫は自序にこう書いている。

私は数年前から支那の古譚に材をとつて、その製作が自然と集まつたら、東南第一花と自負した玉簪花を出さうと思つてゐた。私の創作「李太白」「星」は、私が最初に企てた玉簪花のうちのものである。しかも私は自分の詩興がいつしか變つてしまつた。初めに考えた玉簪花はそれつきりになつてしまつた。（中略）この集中にあるものは私の創作といふよりは寧ろ翻譯なのだから。



表 2 「李太白」所収諸書誌（単行本・文庫・叢書・選集・全集）

出版年月	「李太白」所収諸書誌名
1918年11月28日	『病める薔薇』（天佑社）
1920年 1 月18日	『佐藤春夫選集』（春陽堂）
1922年 4 月20日	『花と実と棘』（金星堂名作叢書15、金星堂）（「丹邱子と星辰」として収録）
1924年12月20日	『李太白』（歴史物傑作選集 5、而立社）
1932年 1 月18日	『佐藤春夫全集』第 2 巻「短篇小説 童話 詩集」（改造社）
1935年11月 5 日	『酒と酒』（文藝傑作選集 5、荻原星文館）
1940年 7 月30日	『支那文学選』（新日本少年少女文庫14、新潮社） （筆者註：収録されているのは「李太白」ではなく、「魚服記」訳文「鯉になつてゐた役人の話」の方であるが、訳者は佐藤春夫と推測）
1941年12月20日	『酒と酒』（文芸傑作選集 5、香蘭堂書店）
1943年10月10日	『山田長政』（名作歴史文学、聖紀書房）
1956年12月15日	『佐藤春夫名作集』（少年少女日本文学選集16、あかね書房）
1958年11月 5 日	『佐藤春夫集』（新日本少年少女文学全集14、ポプラ社）
1963年 2 月	『佐藤春夫・室生犀星・川端康成・吉田紘二郎』（少年少女日本文学全集 6、講談社）
1967年 9 月25日	『佐藤春夫全集』第 6 巻「短篇小説一」（講談社）
1991年 8 月20日	『佐藤春夫』（ちくま日本文学全集13、筑摩書房）
1998年 4 月 9 日	『定本佐藤春夫全集』第 3 巻「創作 1」（臨川書店）

筆者註：春陽堂版の春陽堂少年文庫35『支那童話集』（1932年10月29日）、所収内容未確認。

（傍点筆者）

「空想趣味時代」だからこそ、「三、四年あたためていた卵を孵化した勢に乗じて次の卵」すなわち「李太白」のような力作が生まれたとも言おうか。作者にとって忘れ難い作品となるのである。

力作は、たとい作のでき栄えの思わしくない場合にも作者を生長させ次の作品に必ず何ものかをもたらす作用のあるものだから、心がけのいい作者は常に力作を心がけ、やすやすとできる仕事にさえ、わざと抵抗を求めて苦心を楽しむらしい。（中略）あの若さでなかったら決して書けないものがあり、マンザラ捨てたものでもなく、書いて置いて悔いのないものであった。

（あのころの私と交友）

川端康成は『新文章讀本』（あかね書房、昭和二十五・十一・十）第十章において、多くの作家の処女作について次のような意見を述べている。

至藝の老年の文章に劣らず、處女作の稚拙は美しいとも考へられる。處女作の文章は可能性を持つからであらうか。こみあげる何かを、切なくうたひあげてゐるからであらうか。その意

味からも、私は児童の綴方も好んで読む。稚い文章であらうとも、そこには文章のうぶな魂が生きてゐる。

文章の秘密は、技巧よりも情熱、姿よりも心といへるのであらう。單に文章のみならず、多くの作家はその生涯、處女作以上の傑作を書き得ないやうである。處女作が頂点で、あとはそのバリエーションである場合が多い。

こういう意味で、春夫の「相当の芸術的情熱をも」つ、「空想趣味時代」に書き上げられた「李太白」は、「力作」乃至「試作」として春夫の処女作<sup>①</sup>と同様なウエイトを持つべきではないだろうか。

春夫は、逝去する（昭和三十九・五・六）その直前に、「童心の世界」を『朝日新聞PR版』（四月十九日、二十六日、五月三日、十日、十七日）に連載し、次のように述べていた。

わたしの見るところ、すべての芸術は童心の世界に根をおろしてゐるやうに思へる。それとも、すべての芸術世界には「童心の世界」の空氣が濃厚に立てこめてあるといふのがよいか。

そして、「童心と詩魂とは相似たもの」と言う詩人春夫は、中国の幾多の詩人の中では、「李白が最も童心の人のやうな氣がする」とも語っていた。「あのころの私と交友」の中で、

「李太白」は、わが当年、そうして今も変わらずに愛するあの詩人の生涯を、その作品と伝とによって書いてあの詩情を近代の散文にしてみようと企てたものであった。

と、散文的小説を書くとする当時の創作意図について言明しながら、また次のような感慨も抱き、「李太白」を第二流の作のふりにも見ている。

わが意氣込みほどの成果は挙げられず、にわか仕込みの手うすなものに終ったやうな氣がしたものであった（中略）。思うやうに書けなかったもどかしさが強くなり刻まれ、また作品そのものより書きたいと思った詩情の方がずっと面白かつたのにという憾<sup>うらみ</sup>も多かった。

（「あのころの私と交友」）

そうしてみると、自選集の収録作品に対する著者自身の選択が極めて厳しいという河出書房版『自選佐藤春夫全集』（昭和三十一〜三十三）の中から、枚数の制限があるにしても、「李太白」が省かれたのも理解できよう。青少年文学選集や中国童話集などの編集にも熱心に携わり、数多くの業績を残している春夫の選択から「李太

表3 「李太白」未収諸書誌（単行本・文庫・叢書・選集・全集）

出版年月	「李太白」未収諸書誌名	備考
1919年2月18日	『お絹とその兄弟』（新進作家叢書16、新潮社）	「雉子の炙肉」等収録
1920年1月18日	『美しき町』（天佑社）	「孟沂の話」等収録
1921年10月20日	『幻燈』（新潮社）	「星」等収録
1923年8月5日	『支那短篇集 玉簪花』（新潮社）	翻訳集
1926年9月25日	『蝗の大旅行』（改造社）	「花と風」等収録
1927年12月12日	『佐藤春夫十年集』（南宋書院）	「雉子の炙肉」等収録
1929年1月10日	『支那童話集』（日本児童文庫13）	「百花村物語」等収録
1930年5月20日	『新選佐藤春夫集』（新選名作集、改造社）	「百花村物語」等収録
1932年10月15日	『蝗の大旅行』（春陽堂少年文庫3、春陽堂）	「花と風」等収録
1932年10月29日	『支那童話集』（春陽堂少年文庫35、春陽堂）	未確認
1933年5月5日	『木竹集』（世界名作文庫412、春陽堂）	「願事叶ふ」等収録
1937年1月20日	『佐藤春夫文学読本 秋冬の巻』（第一書房）	「雉子の炙肉」等収録
1937年4月20日	『佐藤春夫文学読本 春夏の巻』（第一書房）	「孟沂の話」等収録
1948年3月15日	『百花村物語』（新日本少年少女選書、湘南書房）	「百花村物語」等収録
1950年2月15日	『蝗の大旅行』（学友文庫4、芝書店）	「花と風」等収録
1950年6月10日	『笛ふきと王』（日本童話小説文庫10、小峰書店）	「花と風」等収録
1950年9月1日	『指紋 他14篇』（佐藤春夫作品集1、好学社）	「雉子の炙肉」等収録
1952年3月5日	『お絹とその兄弟』（創元文庫231、創元社）	「星」等収録
1953年8月10日	『仙人になつた人』（小学生全集39、筑摩書房）	「花と風」等収録
1953年11月20日	『佐藤春夫集』（現代文豪名作全集、河出書房）	「雉子の炙肉」等収録
1955年8月10日	『お絹とその兄弟』（角川文庫1221、角川書店）	「星」等収録
1955年5月30日	『佐藤春夫 室生犀星集』（少年少女のための現代日本文学全集15、東西文明社）	「星」等収録
1956～1958年	『自選佐藤春夫全集』（河出書房）	「星」等収録
1957年9月25日	『佐藤春夫集』（中学生文学全集16、新紀元社）	
1960年8月	『佐藤春夫集』（少年少女日本文学名作全集19、東西五月社）	「星」等収録
1961年11月10日	『仙女の庭』（富山房ギフト・ボックス、富山房）	「花と風」等収録
1961年11月15日	『いなごの大旅行 春をつげる鳥』（日本児童文学全集6、偕成社）	「こおろぎ」等収録
1962年5月30日	『りんごのおばけ』（日本童話名作選集12、三十書房）	「花と風」等収録
1963年12月25日	『佐藤春夫名作集』（少年少女現代日本文学15、偕成社）	「星」等収録
1964年6月10日	『お話宝玉選』（小学館）	「中国古典童話」「中国逸話」等収録

筆者註：この表は主に佐藤春夫生前編集・出版の中国童話集や中国文学を紹介する日本青少年文学叢書関係などを中心に取り上げている。

白」の姿はそう多く見られていないのも事実である(表3)。

実際、当初二十六歳の春夫が文壇への登場を目ざして「田園の憂鬱」を書き上げた時、発表期日がはっきり決まらなかったのも、「現実を逃避するのではない現実を超克したい」「せめては芸術のなかだけでも現実を超克したい」という気持ちで、「田園の憂鬱」稿に手を入れるのをやめて、「李太白」を執筆し始めたのである。結局、のち春夫の代表作となる「田園の憂鬱」よりすらと書けた「李太白」が先に発表された。そのような経緯も念頭に置いておきたい。

## 二 「李太白」をめぐる小説創作評価

——「李太白」は翻案小説であるか？

佐藤春夫の最初の著作集『病める薔薇』(大正七・十一)が天佑社から出版されるとき、谷崎潤一郎はその序を書いてくれた。そこに収められた「李太白」を、「真珠の如く清楚に蜃氣樓の如く繊麗」で、「豊富なる空想と鋭敏なる感覚との産物ならざるはない」と絶賛した。谷崎は当時の文壇の傾向について次のように指摘している。

今日の文壇の在る一部——否、寧ろ大部分には、空想を描いた物語を一概に「拵へ物」として排斥する傾向がある。(中略)たとへ自然派の作家であつても、空想力に乏しくて果たして真

實を表現することが出来るだらうか。若し藝術の領域から空想を除いてしまつたら、いかにして藝術が成り立つだらうか。余の考へを以てすれば、空想に生きる者のみが藝術家たり得る資格があるのである。

「李太白」の内容は伝説と空想から成っているというものの、材料を歴史上の人物に仰いだせいとか、童話小説とされる前に、実は歴史小説としても扱われていた。大正十三年十二月、而立社刊『歴史物傑作選集』の第五巻として「李太白」は書名に採用されて刊行された。その後、荻原星文館より『酒と酒』に改題され、昭和十年十一月、『文藝傑作選集』の一冊として出された。「發行の辭」として、『李太白』と『酒と酒』両書の巻頭に編者の言葉があり、当時ヨーロッパ文学思潮流入の激しさとその影響については、次のような記述から見られる。

明治の末期より澎湃として押し寄せ來つた歐米の新思潮は、大正の初めに當つて具體的に文學の上に現はれた。大正に入つてから我國の文學は全然その姿を新たにしたと言へる。従つて歴史の中に題材を取つた所謂歴史物にも、その影響の顯著なるを見る。これこゝに選する所の、新らしい精神に依つて、新らしい態度に依つて、新らしい立場に依つて作られた歴史物の誕

生を見るに至った所以である。(中略)本選集は現文壇最高作家の歴史物中の傑作のみを選挙して刊行するのである。

昭和十八年十月、聖紀書房より『名作歴史文学』の一冊として刊行された春夫の『山田長政』にも「李太白」はまた収録されるようになった。

当時日本の文壇は欧化万能の風潮が盛んで、中国文学の伝統が途絶えたように見えたのか、春夫は「わたくしは、人々が西洋にばかり気をとられて中国のことを忘れようとしているところから父の注意によって、中国に親しみを持って、その詩や文を読み習ったものである」と、「全くの灯台もと暗く隣国に忘るべからざる国のあることが気づかれない」とも言って、次のように中国文学に深い関心を見せる。

明治の末年から大正の初期にかけて支那の文物に対して文壇で多少の関心を持つてゐたのは、亡友芥川龍之介と自分ぐらゐであつたらしい。(中略)支那文学も支那文学専門家も皆高閣に束ねられてしまつてゐたといふべきであらう。その間にあつて自分のやうに通俗に卑近なのがはじめて役に立つたのである。(中略)その任でないことは千万承知でありながら、日本文化の流れのなかに溶け入つてかすかになりながらも注視すればそ

れと氣のつく日本的支那文化の伝統をせめて一縷でもつないで置くことは無用のわざではないといふだけの念慮が自分にはあつた。

「(からの因縁―支那雑誌の序として―)」

文学的資質を大いに異にしていた芥川と春夫であつたが、ともに中国文学のよき理解者でもあつた。中国文学、特に通俗小説に取材した春夫と芥川の小説創作態度に見える両者のつながりがここにあるといえよう。前述した『支那童話集』(昭和四・一)は春夫が早くから芥川と共著するつもりであつたが、結局芥川の自殺によって、春夫だけの本になつてしまひ、「芥川君がゐてくれたらもつと面白(おもしろ)いものになつたらうと思つて、残念(ざんねん)です。皆さんにもお氣(き)の毒(どく)す」と、その「はしがき」に、深い感慨を吐露している。その辺の詳細は、芥川一周忌を前にして記した「芥川龍之介を憶ふ」一文(17)においても見られる。

春の終わりに書肆アルスが児童文庫刊行の計画でその一冊として芥川と自分に支那童話集を執筆させようと云ふので下相談があつた。ほぼ承諾した上で芥川は打ち合せの都合もあるし一度彼の家まで自分に来ることを希望した。さうしてアルスの編集員を使ひとして自分を迎ひに来さした。用談は簡単に済んで

編輯上の意見として芥川は物語りを年代的に編纂して見たいと云ふことゝ出来るだけ早く原物を纏めようと言った。後で思ふと出来るだけ早くと云ふことを力説してゐた。都合に依つては二三週間程、何処かへ温泉へでも出掛けてそこで一緒に仕事をしたいと言った。(中略)然し自分は家庭上の都合でちよつと当分出かけられさうもなかつた。(中略)何故、自分は彼と一緒にあの時旅行して置かなかつたらう！

芥川が「物語を年代的に編集して見たい」「出来るだけ早く原物を纏めよう」と語つたらしい。もしこの企画が実現していたならば、いかに面白いものができていたのだろうか、実に惜しまれること。中国ものに取材した一連の作品の中で、「李太白」は春夫の第三作目として世に出たものではあるが、創作に生かしたものではないと批評され兼ねない面も招いた。七月号の『中央公論』に掲載後、間もなく、日刊『万朝報』(大正七・七・十、第九千五號)の「小説と脚本」という欄に取り上げられ、次のように紹介される。

自分の力を自負し過ぎて仙界から追拂はれた李太白は、やがては楊貴妃の為に宮廷から追出され、水上を歩かうとして水に落込んで魚に變へられ、やがて天上への旅を企てゝゐる中に大きな鯨によつて天上まで吹き上げられ遂に星になつたといふ想

像物語である。

そして、小説の構成について、なんと「筆致は巧だが、何だか種本を引伸ばしたやうな氣がしていやでたまらなかつた」と酷評された。ようやく日本の文壇の第一線に頭角を表そうとし、「李太白」を「自分の文学の生涯のふり出し」<sup>(18)</sup>とも見なした春夫が憤慨し、「述懐その折々(その二)」(河出書房刊「自選春夫全集 月報」其の二、昭和三一・十一)において、次のようにその不満を漏らしている。

わたくしはじめて中央公論に「李太白」を出した時、一新聞の新作紹介のやうなカコミ欄の匿名子が拙作を支那小説の翻訳だとか翻案だとか書いてゐたのを見て以来、わたくしはすっかり批評家といふもののデタラメを知つて以来、それを馬耳東風、齒牙にかけない洗礼を受けると同時に、これではならないうと、頼まれさへすればわたくしも批評の筆を執るやうになつたものであつた。わたくしの批評は、だから、作者の意図したところを汲み取るところを第一義と心得てゐるつもりである。意図を知らずに評価をいそぐ現代の批評に対する一種の抗議のつもりである。

自分の「作品が、人々から無理解に罵られる時には、それに対し

て正当な弁護も出来ず」(大正七・十二『新潮』第二十九卷第六号の「叙事散文詩的作品」と春夫が言ったことを忘れてはならない。しかし、妙なことに、その「正当な弁護」は、『万朝報』の創作月評にひどく取り扱われてすぐではなく、なぜか昭和三年になってからようやく「自作に就て年少の読者のために」の一文において初めて見られる。

私が『李太白』を書いた時に、或る匿名の批評家が支那小説の翻譯に過ぎないと知ったかぶりを言つてゐましたが、私の『李太白』と同じやうな支那小説があつたら、読ませてもらひたいものだと言ひたいのです。『李太白』は不手際な大人の童話で、出来そこなつた神仙譚ですが、全然私の創作に違ひありません。

その後、折に触れて、『李太白』は自分の創作だと主張し続ける。<sup>⑧</sup>なるほど、前掲講談社版『全集』第六卷において、『李太白』は「翻譯」の部ではなく、「短篇小説」の部に収められ、そして春夫の死後初めて出された完本全集『定本佐藤春夫全集』(臨川書店、平成十・四)にしてもやはり「創作」(第三卷)の部に収められている。無論、『李太白』を収録している処女著作集『病める薔薇』のたぬに序を書いてくれた谷崎の筆によって、春夫の作品は充分文壇か

ら認められたといえよう。春夫自身も「李太白」の小説を構成する際に谷崎の熱心な参与について幾度となく文中で言及している。

さうして、新しく出来た「李太白」の構想を話して、それを書いて見ることにした。谷崎君はその構想には非常に賛成であつたが、出来上つたものを見て、幾らか不満だつた。しかし、まだ好いものとして、それを「中央公論」へ発表するやうに世話をしてくれた。そして、活字になると、原稿で見た時よりも非常によくなつたといつてくれた。

(「アントニオのやうなセンチメンタリズムから生まれた」田園の憂鬱」、大正八・一『新潮』第三十卷第一号)

当時春夫との交際があまり親密であるのを顧慮して、谷崎は春夫に対する筆による賞賛を幾分か控えめにしていたらしいが、なおかつ春夫の第一著作集を褒めずにはいられなかった。にもかかわらず作家として中央文壇で一本立ちしようと目指す春夫の出端をくじくように、『万朝報』のカコミの創作月評では、この苦心の創作「李太白」は支那小説の書き直し云々とひどく言つた。

これから作者の「正当な弁護」が昭和三年になってから初めてされたその背景、及び「種本を引伸ばした」と思わせた「李太白」の小説創作について検討していこう。



一九一七年夏、東京帝国大学の文科において、第一回夏期「支那文学概論」公開講演が文学博士塩谷温により開かれた。翌年、その筆記は活字印刷に付されることとなった。氏は僅か六回の口演内容を修正増補し、更に戯曲小説の発展をも叙述した。上梓する前に、「以て我が支那文学界の缺陷を補はんと欲するに在り」と序文に意味深長に述べた。もっとも中国の大学での文科の設置も一九〇〇年になってからのことであり、中国の小説史に関して、従来、中国人の手による系統的かつ歴史的な記述はなかった。塩谷氏の『支那文学概論講話』（大日本雄辯会、大正八・五・二十）が出版以来学界から注目を浴び、中国語への翻訳も続々とされた。一方、北京大学の文科では、一九一七年一月、小説史の科目が設けられた。六年後の一九二三年、魯迅は北京大学における「中国小説史」講義（一九二〇・一二・二十四より開講）を元に、中国における近代化的な立場からの小説史研究の皮切りと見なされる『中国小説史略』<sup>(2)</sup>を出版した。無論塩谷氏の『支那文学概論講話』はかなり参考にした。

『支那文学概論講話』が出版されてから、塩谷氏は内閣文庫をはじめ、宮内省の図書寮などで中国小説書物の調査を始めた。一九二〇年代後半に入ると、氏は長い間中国で隠滅した非常に珍奇な『三言』の原書を日本で見つけ出し、その考察の結果を続々と論文に発表した。<sup>(3)</sup>これは中国の小説史上においては大きな出来事であった。『三言』については、『醒世恒言』とその選本『今古奇観』

を除いては当時殆んど知られておらず、日本に伝存する明代の小説を調べた塩谷氏の論文を俟って初めて明らかになったのである。魯迅が『中国小説史略』を著する時でさえも、目を通したのは『醒世恒言』のみである。中国の馬廉氏は塩谷氏の論文に頗る関心を示し、直ちにそれを「明之通俗短篇小説」として孔徳学校の『孔徳月刊』の第一期及び第二期に訳載し、また以下のような付言を付け加えた。

私は鹽谷氏の「明代の通俗短篇小説」の一文を譯し了へて、鹽谷氏がわが國の以前の學者たちが注意せず小道と考へてゐた問題をばとらへて來て立派な一篇の系統的研究にまでされたことに對して甚だ感謝する次第である。そうしてかつ我が國內には已に失散して了つて日本になほ遺つて居るいくつかの書籍を私達のために紹介して下さつた點に對しこの上もない喜びを抱く次第である。

そして、この付言とさらに進められた馬氏の研究成果は、早くも年末に、「關於白話短篇小説『三言』『二拍』」と題され、『語絲』第一一期（北京北新書局、一九二六・一二・二十五）に掲載された。翌年、この論考は、「譯文及附言」という副題をもち、前掲した日本語文に訳されたのである。訳者馬堯氏が魯迅の紹介で孔徳学校を訪ね、そこで馬廉氏に会い、原文の抜粋を、『斯文』（斯文会、昭和



二・四・一)の第九編第四号に掲載したわけである。こうして中国文学界における『三言二拍』研究がようやく開花し、今度は日本に紹介されたのである。

こうした中国の俗語小説、とりわけ自然主義風の市井人生活を描く小説に頗る高い関心を見せた春夫が当時のこの大情報を見逃すはずはあるまい。「李太白」は中国小説の書き直しだという酷評に対し、「全然私の創作に違ひありません」「私の『李太白』と同じやうな支那小説があつたら、読ませてもらひたいものだ」と春夫が強く主張し始めるのは、『三言』原書が日本で再発見(一九二六年)されて以降の昭和三(一九二八)年になるのも頷けるだろう。

『三言』とは、十七世紀はじめ、明末の編者馮夢龍(一五七四—一六四六年)によって編纂された短篇白話小説集であり、『古今小説』(別名『喻世明言』)『警世通言』『醒世恒言』の三部からなり、それぞれ四十篇、併せて百二十篇である。のち選本『今古奇観』(明、抱甕老人編)が一世を風靡し、かえって本家本元の『三言二拍』の方は、廃れてしまうという結果になってしまった。日本の塩谷氏が原書を再発見するまで、『三言二拍』は中国文学史の闇の中に長く葬られ続けたのである。中国においては、従来戦乱が多かったため、文物、書籍の紛失がひどく、また儒家思想や封建制度が厳しいため、統治に有害と認められた思想や書籍は、一切禁じられたり、壊されたりした。恋あり、不倫姦通あり、殺人あり、およそ多種多様の内

容を網羅して、時には猥雑を窮めるものも含み、非士大夫階層的な『三言二拍』は、こうして選本『今古奇観』に追い越され、いちはやく姿を消してしまつたのである。

しかし、中国の明、清時代と対応している日本の江戸時代においては、意外にも『三言二拍』は脈々と生き続けた。江戸文学に看過できない影響をもたらし、読本に影響を与えたのも、贅言を要しない。さらに、これと並行して、『三言二拍』の翻案小説も盛んに作られ、上田秋成の『雨月物語』にみえる諸作品は、まさにその代表的なものである。また、塩谷氏をはじめとする更なる精密なる研究によって、『今古奇観』に収められていた小説の出処は明らかになつた。宋以来の口語体小説の短篇を代表的に選んだ『今古奇観』であるだけに、中国文学語学等の研究者には貴重資料であるが、一面通俗的な説物としても甚だ趣味の深いもので、中国では永い間民衆に歓迎されつつ学者も不学者も男子も女子も愛読して今日に至つたのである。

こうした白話小説集に李太白伝奇を小説題材に取り扱う話があつたのも無論のことである。そもそも李太白に関する伝奇は、史書『旧唐書』と『新唐書』を始めとしてごく簡単に書かれており、通俗的にも知られている。その他、清時代の王琦注本『李太白全集』『序誌碑伝年譜』だけ見ても、李白に関する事跡や伝奇は随所に見られる。春夫が執筆の際に、中国の歴史書や李太白全集注釈本など

表4 佐藤春夫の三言・『今古奇観』取材諸作品（初出）

掲載年月	作品名	出典
1919年7月	「李太白」（『中央公論』第33巻第7号）	『醒世恒言』第26巻 『今古奇観』第6巻
1920年8月	「孟沂の話」（『解放』第2号）	『今古奇観』第34巻
1922年10月	「花と風」（『女性改造』創刊号）	『今古奇観』第8巻
1922年10～11月	「百花村物語」（『改造』第4巻第10～11号）	『今古奇観』第8巻
1926年7～10月	「上々吉」（『苦楽』第5巻第7～10号） （『願ふこと叶ふ』、支那文学大観11『今古奇観』所収、 佐藤春夫訳、支那文学大観刊行会、7月29日）	『今古奇観』第7巻
1936年9月16日	「幸福児」（増田渉訳、世界短篇傑作全集第6巻『支那 印度短篇集』、佐藤春夫編、河出書房）	『今古奇観』第36巻
1940年7月30日	「五つで天子さまにお目どほり出来た話」（新日本少 年少女文庫第14篇『支那文学選』佐藤春夫編、新潮社）	『今古奇観』第36巻
1945年5月10日	「三妖一家の話」（サンデー毎日）	『警世通言』第19巻

筆者註：出典欄は、すでに『今古奇観』に収録されている小説なら、『今古奇観』の方のみ記す。なお、佐藤春夫「李太白」以外の諸作品は作者よりそれぞれ出典が明らかにされている。

を大いに参考したことは勿論考えられる<sup>②</sup>。一方、中国白話小説集に、李白についての俗間の伝説をすべてこきまぜたように小説に敷衍したものがある。それが前述した俗語小説集『三言』の『警世通言』第九巻に収められた「李謫仙酔って嚇蠻書を草すること」（「李謫仙酔草嚇蠻書」、以下「李謫仙」と略す）であり、のち選本『今古奇観』の第六巻にも収録された。春夫がいずれかを見て、参考にした可能性もあると推測される。周知のように、春夫は『今古奇観』に頗る愛着を示しながら、その中の何篇かを翻案している（表4）。無論白話小説「李謫仙」だけに即して、「李太白」を執筆したとは、とうてい断定できない。少なくとも当初参考にした諸書の中で、「李謫仙」の占める比重は極めて大きいとはいえよう。この小説は題名で示されているように渤海国への返書の起草を命じられたことに重点を置いており、次のような物語となっている。

唐の玄宗のときのこと。李白は科挙に応じたが、賄賂を期待していた貪官楊国忠と高力士のために落とされ辱められた。たまたまその頃、渤海国の王が唐の天子に書翰を寄せたが、蛮語を読める者がおらず、李白が呼び出された。李白は読み、かつ蛮語で返書を書いて、渤海国王の無礼を叱した。これを機に、李白はわざと高力士に靴を脱がさせ、楊国忠に墨を磨らせるよう天子が命令することを乞うことで、当時受けた恥辱に対する怨みを見事にはらした。しかし、玄宗の求めに応じて作った楊貴妃をたたえた詩「清平調三章」は天

子の喝采を博したが、かねがね李白を憎んでいた高力士が、この詩が貴妃と安禄山の私通をそしつたものだとして貴妃をそそのかし、玄宗の寵愛を失わせようとした。このことを知った李白は自分から求めて玄宗のもとを去った。皇帝から頂戴した錦の衣を身にまとい、「錦衣公子」と自称し、放浪の旅を始めた。路上でいろいろな出来事に逢い、のち月夜に采石江で遊んでいたとき、上帝の迎えを受け、鯨魚に乗って仙界にもどり、太白星の星主の任に復した、という。

これで見ると、渤海国への返書の起草などを除けば、春夫の「李白」には、「李謫仙」からの翻案だと思わせる部分はかなりある。ちなみに「李謫仙」やその類話原典と思わせるものは、例えば『松雑録』（『大平広記』巻二百四に「李亀年」として収録、註に「松窓録」よりと記す）、「有像列仙全伝」巻六「李白」、「酉陽雜俎前集」巻十二「語資」、「本事詩」李白条、「唐摭言」巻十二「敏捷」、「青瑣高議後集」巻二「李太白」、「容齋隨筆」巻三「李太白」、「二老堂雜誌」巻五「記大平州牛渚磯」、「酒史」巻上「飲酒小伝」、「野客叢書」巻七「李白」、「国色天香」巻三「快観爭先番書」・「快観爭先嚇蛮書」、同書巻六「山房日録李白供状」、「隋唐演義」巻九「李太白立掃番書」などがある。また清・王琦『李太白文集』註本や宋・薛仲邕編『李太白年譜』附「伝疑」をめくると、李白伝奇や逸話の紹介は実に多いことに気づくだろう。好事家と言われるほどの佐藤春夫であるから、いずれかをしかも複数参考にしたのも不思議ではない。

その辺について牛山百合子氏（前掲講談社版全集第六巻）をはじめ、前掲山敷氏論及び須田千里氏論（注26参照）に考察されているので、重複を避け、ここでは「李謫仙」原典と考えられるものを取り上げるのみにとどめる。楊国忠に墨を磨らせた話は、李白の伝説や履歴を大量に収集している王琦註本をめくっても案外見つからない。

「李謫仙」では語られているが、その他、筆者は目下、前掲『国色天香』と『隋唐演義』しかそれらしい描写が見当たらない。また春夫作の後半のストーリー、即ち、李白が水中に落ちてからの散文詩的部分は、「李謫仙」或いは李白に関する諸伝奇を見てもそれらしい痕跡は見当たらない。いわば「捉月騎鯨」伝承ならば、「李謫仙」など諸中国原典や詩に拠ると思われるが、春夫の「李太白」になると、水に落ちた李白が鯨に嘖かれて昇天する、という風に「騎鯨」伝説からのすり替えのきらいがなくもない。この点においては、春夫のオリジナルな創作だとは確かに言い難い。或いは李白詩「有所思」（所思有り）からの連想とも考えられよう。これは李白の精神生活の一面である遊仙的気分をよく表している一首でもあり、次のような内容である。

我思仙人

乃在碧海之東隅

海寒多天風

我仙人を思ひ

乃ち碧海の東隅に在るを

海寒くして天風多く

白波連山倒蓬壺

白波連山蓬壺を倒さんと

長鯨噴湧不可渉

長鯨噴湧渉るべからず

撫心茫茫涙如珠

心を撫し茫茫涙珠の如し

西来青鳥東飛去

西来の青鳥東に飛び去る

願寄一書謝麻姑

願はくは一書を寄せ麻姑に謝せん

注目したいのは「長鯨噴湧不可渉」のところである。長大な鯨が潮をはげしく噴き上げていて、到底青海の東隅に在る仙境（蓬萊）と「方壺」に渡り着くことができない、という。「長鯨」は、晋・左思の「呉都賦」において、「長鯨吞航、修鯢吐浪」として歌われている。春夫が本文に、「この鯨は身のほども知らないで、仙境へ押渡らうとする不敵な俗人どもの船を防ぐために、蒼梧や蓬壺の近海を守りながら游戈して居」る、というのは「長鯨」のことだろう。非現実的な理想世界を追求する魚の李太白が「長鯨」に阻害されることもなく、むしろ祝福され鯨の助力によって天上に送られる、これが春夫の工夫と見てよい。

それでは、「錦絲魚」という魚に変身して、「金龜」の水先案内で天界に昇っていく部分はどうであろう。かねてから春夫が頑として言い張った「全然私の創作に違ひありません」ということについては、果たして疑う余地が微塵もなからうか。次節から春夫が「李太白」小説創作にあたって、中国諸原典、特に『三言』の『醒世恒

言』若しくは選本『今古奇觀』からいかに自分の小説にその空想のアイディアを盛り込んだか、を探っていききたい。

### 三 佐藤春夫の「李太白」と谷崎潤一郎の「魚の李太白」

——「金龜」に織り込まれた友情

佐藤春夫の「李太白」小説後半に登場する「金龜」は、李白の「お机のお近くに侍つて居て、朝夕先生の御寵愛を受けました」置物として描写され、訪ねてくれた知人賀季真（知章）をもてなすために、李白が手元にあった置物の金の龜を売って、酒を買った、という。

そもそも「金龜」とは、「魚符」や「魚袋」の一種であり、それは唐代の制度として、五品以上の官員が魚の形をした符（わりふ）を袋に入れて身に着けたものの、言わば一種の身分証明書である。唐・張鷟の『朝野僉載』によれば、鯉魚の形になぞらえたのは、鯉（唐の宗室李氏の「李」と同音）の強さの兆しを意味しているからである。魚の代わりに龜を用いたこともあり、これを「魚袋」もしくは「龜袋」という。そして位階によってその装飾を異にして、三品以上は金で飾り、四品は銀で、五品は銅で飾った、という。

実際に李白にまつわる「金龜」の話は史実であり、李白自身も「酒に対して賀監を憶う二首の序」に、「太子賓客賀公、長安の紫極宮に於いて余を一見し、余を呼びて謫仙人と為し、因りて金龜を解

きて酒に換え、楽しみを為す」と記し、その名残を惜しんでいる。<sup>(26)</sup>  
 ただし、「金亀」を売って酒を買ったのは李白ではなく、賀知章の方であった。ともかく詩的才能をかの賀知章に賞賛され、官員が身につけた一種の貴い身分証明、すなわち宮廷の「出入証」ともいえる「金亀」まで酒に換えて楽しんでくれたことに、李白は如何に感激しただろう。

当時、太子賓客であり玄宗に目をかけられていた賀知章は、李白より四十四歳も年長であるが、李白を認めてくれた恩人であり、かつ李白とともに酒中の八仙といわれた飲み友達でもある。長安において必ずしも愉快ではなかった生活を慰めてくれる人はこの賀知章であり、また李白にとって相談相手になってくれた人でもあった。

さらに賀知章の紹介で、李白は翰林供奉という御用文人となったらしい。春夫は、「李太白」執筆の際に、李白と賀知章の友情をたたえるこの美談に感動を覚え、谷崎潤一郎との深い友情を思い浮かべ、また「李太白」構想の段階から自分の相談に応じてくれた谷崎に対する感謝の気持ちも含めて、「金亀」を海に落ちた李太白の水先案内人としていっしょに天界まで昇り、星になるよう登場させたのではないかと思う。

和歌山県に生まれ、中学を出て上京した春夫は、与謝野寛の新詩社に籍をおいて多くの詩を作り、また、当時の第一線の批評家であった生田長江に師事した。大正五年二月、芥川龍之介が「鼻」(第

四次『新思潮』創刊号)で華々しくデビューしたことに刺激を受けた江口渙らのグループが同人雑誌『星座』を企画し、春夫もこれに誘われた。翌年一月に創刊された『星座』の表紙は春夫の手になっており、その巻頭を春夫の小品文「西班牙犬の家」が飾った。みずみずしい幻想とあかぬけた文体とで好評を得た。その後、江口を通して春夫は芥川を知り、『星座』の同人誌を読んだ芥川から初めての書簡(四月五日付)を受け取った。六月、「田園の憂鬱」の第一稿とされる「病める薔薇」を師生田長江の推薦で雑誌『黒潮』(第二巻第六号)に載せた。本格的に散文小説を書き始め、その続稿を出してもらうはずであったが、「あんな下らないものを出すと君の雑誌の値打が下がる」と言った人があったとかで、春夫はせっかく書き上げた続稿五十枚ほどを引き破った。<sup>(27)</sup>それは、以前春夫が『スバル』誌上で早稲田の人の誤訳を指摘したことに対しての報復、つまり早稲田一派が「病める薔薇」の後編の出ることを妨害したのだと、春夫は回想している。

同月二十七日には、芥川の第一創作集『羅生門』の出版記念会が開かれ、春夫はそれに出席して発起人の一人として開会の辞を述べている。閉会の辞を述べるのを担当し、発起人の一人でもあった『星座』同人江口は、のちに『わが文学半生記』(角川書店、昭和三十四・九・二十)において、芥川の出版記念会のために駆けずりまわる当時の自分と春夫の姿をこう追憶している。

その晩の会の空気には、若いジェネレーションの文壇への出  
発の新しい宣言というようなものがよく流れていた。そのせ  
いで私も佐藤もどこか興奮していた。いまから考えると、その  
晩の私も佐藤もやはり芥川と同じように若くて、そして健康で、  
その上、近き日のうちに何かを大いになすところあらんとする  
自負と期待で、心が一ぱいにふくれ上がっていたせいであろう。

〔「羅生門」の出版記念会と佐藤春夫〕

よい意味で、春夫はのちに文壇の争友ともなる芥川との交友が急  
速に進みつつあったようだった。その出版記念会をきっかけに、谷  
崎とも知り合いになり、親交が始まったのである。春夫はこの『羅  
生門』の出版記念会について、次のように語っている。

大正六年の初夏、芥川の最初の短篇集「羅生門」が出た時、  
江口渥が、一つ出版記念会をやろうと云い出し、谷崎にも発起  
人になってもらおうというので、それなら僕がよく知っている  
だろうということになったが、実は知らなかった。そこで江口  
が、誰かから紹介状をもらって来て、江口と、ほかには久米、  
芥川など四五人づれで一緒に会いに行ったのがはじまりだ。そ  
の頃から急に親しくなった。

谷崎の鞭撻を得て、春夫は「田園の憂鬱」の続稿を書き続ける気  
になったのである。「病める薔薇」続稿の発表できない顛末を春夫  
から聞くと、谷崎は慨嘆した。さらに「田園の憂鬱」の筋を問い、  
非常に面白いと言って、書けば発表するところを探そうと熱心に勧  
めてくれたこともあり、二十五歳だった春夫は本格的な仕事をしな  
ければならないという内心の要求が強くなってきていたに違いない。  
金の必要にも迫られていたため、原稿の売れる人間にもならねばい  
けないのであった。<sup>20</sup>谷崎はこのとき三十一歳で、当時最も有力な新  
進作家であった。しかし春夫は自分より六歳年長である谷崎に対し  
ても臆することのない青年であった。まだ作家として独立していな  
かったが、機知の鋭い座談の名手であった。一般の文士たちと交際  
することをあまり好まなかった谷崎ではあったが、最初から春夫の  
文才を認め、対等に友人として遇したようである。

故郷で「田園の憂鬱」を書き終えたが、なおいくらか不満があり、  
書き直そうと思いつながらその不完全な原稿を持って上京した春夫は、  
谷崎が見ようというのと、それを引っ込めて、代わりに「李太白」の  
構想を話して、相談に乗ってもらい、それを書いてみることにした。  
「酒仙李白を書くためには、是が非でもシナの酒の名の十や二十は  
知らないではわが空想の世界へおびき入れられないと考えたわけで、

これは一種の催眠術的暗示作用になる」、「そんな手間でもかけないことには、おとなという奴は到底おとぎばなしの世界へは導き入れられない」と考えた春夫の相談に応じて、谷崎が清代の百科事典ともいべき書物『淵鑑類函』を教えてくれた。そこで春夫は上野図書館に行つて、熱心に研究したらしい。春夫のような作家に見られる「詳悉法的な細かい文章」について、川端康成は次のように説明している。

この世ならぬ夢の國をまざまざと描き出し、あり得べからざることとあり得ると人に思はせるには、より多くの言葉を費し、より巧みな話術に依らねばならないのは勿論である。つまり、現實生活の日常茶飯事や常識的な思想感情から題材が遠ざかるほど、讀者は一層多く作者の想像に助けられなければ、その世界に入つて行くことが出来ない。また作者は一般人の思ひも及ばぬ美しい幻の城を描き出す自分の想像力を自ら喜び、それを表現する楽しみに酔うて、所謂藝術至上主義らしい創作態度を取るやうになる。

〔新文章讀本〕

さて李白に関する諸伝記や類書『淵鑑類函』を参考にしながら、ごく短い間で「李太白」原稿を書き上げ、意気込んだ春夫は、谷崎

に読んでもらおうといそいそ出かけてみると、谷崎が外出姿で門前にいたので、いっしょに芝日かげ町の上山草人宅に出かけてそこで読んでもらった、という。その頃、草人は、眉墨を呼び物に化粧品を並べて「かかしや」という小店舗を新橋駅の付近に営んでいた。春夫は次のように当時のことを回想している。

草人の硯箱を引き寄せて読みはじめた彼は、わたくしの文章のテニヲハの乱れや、形容詞の前後したものなどを改めながら、ところどころに寸評を口で加える。ここはむずかしいところをよく書いたと好評のところもあれば、これはちよつと冗漫だから思い切つて割愛したらどうかと、二、三行ばかり一気に棒を引いてしまふところなどもでて来た。そばから草人がまた草人らしい評言を加える。

〔あのころの私と交友〕

こうして一閱が終わると、谷崎はさっそく『中央公論』へ持ち込んで、第一級の稿料までもらつて来てくれた。

詩壇の片隅でうつくつの末、散文を夢みていた全くの無名時代、中央公論に作品の出た第一作なのだから、当然まだ海のモノとも山のモノとも知れない小僧っ子に相違なかった。



〔あのころの私と交友〕

そういった春夫にとっては、谷崎がもらって来てくれた一枚一円という稿料は、初めてであった。『改造目次総覧』によると、当時『中央公論』が博文館の『太陽』をおさえてのびたのは、原稿料の値上げと大広告主義だった、という。そして大正八年半ば頃の『中央公論』の原稿料は、作家には四百字詰一枚一円ないし一円五十銭、論文や読物記事の場合は一円が最高であったらしい。

谷崎の鼓舞を得て、春夫の鬱屈した文学生活に一脈の生気を与えられ、生活上の窮状も救われたのである。漸く舞台の脚光を浴びた春夫は、谷崎、芥川とともに、当時の芸術至上主義を代表する新進作家の一人と見なされるようになった。「李太白」稿を草した時は、馬場孤蝶が二月号『中央文学』の「有望にしていまだ現はれざる作家は何人なりや」アンケートに、春夫の名を挙げたが、その一年後、改造社が、新雑誌『改造』発行披露宴（二月）に論壇文壇の名士を招待し、新進作家となった春夫の姿はもうその中に交じっていた。春夫は常にその感謝の気持ちを胸に抱き、絶えず文中にてそれを言及する。例えば、大正九年に「嬉しかつたこと苦しかつたこと」において、谷崎から知遇を得たことを次のように語っている。

今迄の文学的生涯の中で、一番嬉しかつた事は『田園の憂

鬱』の梗概を谷崎潤一郎に話して、それを是非書くやうにとすゝめてもらつた時の事です。その貴重な自信の瞬間を得なかつたら僕は多分何も書く気にはなれなかつたかと思ふ。その意味を僕は常に谷崎に感謝し、そのひと晩を私かに記念としてゐます。

（傍点符号原文）

そして春夫と谷崎の深い友情に対し、芥川が「君と僕とを近づかせなかつたものは、君と谷崎との友情だよ。僕は嫉妬を懷いてゐたんだね」と愚痴をこぼしたことさえある。前述した新雑誌『改造』の創刊号（大正八・四）に、「文藝漫録」として、この二人の友情について、次のように読者に伝えている。

佐藤春夫は、何かと云ふと「谷崎」がと云つて谷崎潤一郎の事を云はねば、氣が済まぬと云つた風がある。佐藤春夫に、これだけ、思はれてゐる潤一郎は、幸福な男だ。

「李太白」に織り込まれた友情の象徴である「金亀」、そして「金亀」と共に天界に昇る構想のもつ真意を、「李太白」構想の段階から相談に応じた谷崎は勿論心底から理解したはずである。「李太白」が発表された翌月にすぐさま「魚の李太白（お伽噺）——佐藤春夫



君に贈る——」を書き、春夫に対する返礼であるかのように、『小説』九月号に掲載した。

谷崎が書いたこの短篇は、春江という令嬢が親友桃子の結婚祝いのために、日本橋通りから銀座通りの商店を一つ一つ覗いて歩き、やっと一匹の大きな縮緬の鯛を買って贈るという話である。色々思案を巡らせて買うことに決めたこの鯛なら、きっとお人形や押し絵細工が好きな桃子さんに喜ばれるだろうと思い、果たしてこの縮緬の鯛は、春江の思いつきの良かったことを皆に口々に褒め称えてくれた。二三日過ぎてから、鯛はまた行儀よく立派な木の箱に収められ、黒羽二重の紋附を着たお爺さんの家令に護られ桃子のお邸へ車で運ばれて行った。すっかり桃子に気に入られ解くのも惜しまれたこの鯛は、突然口を開き、李太白だと自称したが、星になったはずの李太白が目の前には訝しげに信じようとしないうちに、佐藤春夫の「李太白」はいいかげんな出鱈目だといって、わが身の上を話し始めるのである。この鯛の言葉によると、佐藤春夫という作家は錦絲魚に騙されたのである。李太白は采石の磯から揚子江に沈んで南の海に流されてゆくうちに、そこは普通の海と違って塩水の代わりにお酒の水が流れているので、真紅な鯛になったのである。あの辺の川や海の中には、自分が李太白だと言って嘘をついている魚が何匹となく泳いでいる。けれども、李太白ともあろうものがありきたりの鯉や鱸や錦絲魚などになるわけがあらうか。私（鯛）が

李太白だという証拠に、まだこんな赤い顔をして酔っ払っている、という。実にユーモア溢れる好短篇であり、春夫の「李太白」に対するパロディーでもあると見てよい。

この贈答文といえる作品に、谷崎は鯛の李太白の間拔けな語り口を借りて、次のように述べている。

あの男の書いた話は、あれはみんな好い加減な出鱈目でございますよ。あの男の云ふ事なんぞを、うっかり信用なすつてはいけません。（中略）あの男はたゞ、支那の昔噺を何處かで聞き齧つて来てあんな物を書いたのでございます。李太白が採石の磯から、水へ飲まつたまではほんたうでございしますが、錦絲魚になつたの、星になつたのと、あんな嘘を真に受けたら其れこそ大變でございます。

（傍点筆者）

ひょうきんに言っているようであるが、実はこのような言葉のやり取りの裏に、中国のある故事と典故が踏まえられているのである。それを述べる前に、次節においてまず李太白が魚に変身する発想の典拠を探索しておきたいと思う。

#### 四 「李太白」と「魚服記」〔薛録事魚服證仙〕

佐藤春夫の「李太白」において、自分の姿を「金亀」から聞いた時、水に落ちた李太白は魚になったという自覚が一層はつきりとした。すると、「枯魚過河泣」という古樂府詩を思い出し、感興がむらむら湧き出したので、心の中に一つの詩がひとりでに出来上がった。それは、李白が実際に「白龍魚服」という故事を踏まえて書いた次のような詩である。

白龍改常服	白龍常服を改む
偶被豫且制	たまたま予且に制せらる
誰使爾為魚	誰か汝をして魚とならしむ
徒勞訴天帝	徒勞天帝に訴う
作書報鯨鯢	書を作って鯨鯢に報ず
勿恃風濤勢	風濤の勢いを頼むなかれ
濤落歸泥沙	波は落ちて泥沙に帰し
飜遭螻蟻噬	かえって螻蟻のかむに遭う
萬乘慎出入	万乗出入を慎む
柏人以為識	柏人もってしるすを為す

けれども、「金亀」には、肝心のこの詩の意味がよくわからない

という。そこで、魚の李太白は説明をし始める。

むかしむかし白龍がふと氣まぐれにいつもの衣裳を脱ぎすてて、魚の衣裳をつけて見た。さうしてとうとう豫且といふ漁師につかまってしまった。そこで天帝に命乞ひをすると、お前を魚にしたものは誰だ——皆身からだでた錯であらうと、天帝は相手にして下さらない。そこで魚服をつけた白龍は、泣く泣く手紙を書いて、友達鯨に身の上を訴へた。かうなつた上は何れは自分も干魚にでもされてしまうことであらう。それにつけても、君たちとてもあまり威にまかせて、風濤の勢を笠に着て居ると、しまひには泥沙の上へ曳ずり上げられて、蟻や螻ども輩の餌になり、恥を曝すやうなことがないとも限られない。人間の世界でも萬乗の天子高祖が柏人の地で逢つたやうな出来事もあるのだから。

（李太白）

魚の李太白は、あの「白龍が常服を改めた」句が気に入ったものか、それが口癖になって、何かの弾みにはきつとこの句ばかり口ずさむ<sup>36</sup>、という。「白龍」とは、天帝の使者であり、神靈な白龍が魚に化けて豫且といふ漁人に捕へられたことから、「白龍魚服」が転じて、貴人が微行して危険に遭う喩えとなる<sup>37</sup>。さらに「魚服」は尊

者が卑者の服に変装する意味から、貴人が不測の事態に逢うという意味にも転じた。

この「白龍魚服」故事については、周知のように、唐代伝奇「魚服記」及び明の白話小説「薛録事魚服證仙」にも見られる。「魚服記」(唐・李復言著)は、『統玄怪録』を典故として『太平広記』巻四百七十一に収められ、主人公の名を取って「薛偉」と題されていたが、明の陸楫撰『古今説海』説淵己集(辰巻三十五)に初めて「魚服記」と呼ばれ、以来通称になった。話は後世の人々の興味を惹いたとみえ、明の時代になると、馮夢龍編『醒世恒言』巻二十六に「薛録事魚服證仙」として更に道教の謫仙人思想が色濃くかつ面白く敷衍された。日本でも江戸時代に上田秋成の『雨月物語』巻二「夢応の鯉魚」に画僧興義の逸話として見事に翻案されている<sup>③</sup>。小泉八雲もそれを再話物語として『日本雑記』<sup>④</sup>に収めている。近代になると、「魚服記」は中外を問わず、実に頻繁に紹介されていく。例えば春夫編著の『支那文学選』(昭和十五・七、新潮社『新日本少女文庫』第十四篇)でも「鯉になつてゐた役人の話」として若い読者に紹介されている。この一篇は訳者不明ではあるが、佐藤春夫選となり、本文末に春夫によるものと見なされる解説が次のように載せられている。

この話は、唐の時代の『魚服記』といふ題の小説ですが、作

者の名はわかりません。我が国の徳川時代の終りに近い頃、上田秋成といふ人が『雨月物語』のなかに「夢応の鯉魚」と題して、これを上手に書き直してゐるから、この話は我が国でもよく知られてゐます。

「雨月と春雨とが私の愛読書であつた」(傍点春夫)と自ら秋成文学に愛着を示し、秋成の「夢応の鯉魚」を現代文に訳したことさえもあつた<sup>⑤</sup>春夫が、謫仙人という言葉に惹かれながら、道教的色彩の濃い神仙譚である中国原典を読まずに見逃すことがあるだろうか、疑問に思わざるを得ないところである。前掲の『醒世恒言』刊本は、海を渡って、江戸後期において、例えば、寛政期に『通俗醒世恒言』(二七八九年刊、石川雅望訳)などが出されていたりして、多くの民衆にとっては耳に親しみ易いもの、一般化されていたと考えられる。秋成文学を熱愛し、かつて芥川と谷崎と熱狂的に『雨月物語』を討論し意見を交わした<sup>⑥</sup>春夫は当然その中国原典を読んだはずである。白話小説の従来形式ではあるが、本文に入る前に、まず詩の引用がある。「薛録事」文の冒頭にすぐさま出るのがこの「白龍魚服」故事であり、それも詩人春夫の目を惹いたのであろう。「李太白」を創作する動機について、春夫は、『田園の憂鬱』を書くために故郷に帰っていたある夜、「中天の満月を額にして、その清輝が水色のうす絹の裳になつて地上に漂いゆれているような巨大

な女人を幻想したことから、水上の月を掬うて水中に落ちたという李太白の伝説を思い出し、水中に入った李太白が魚に変身したと空想した」と、回想文「あのころの私と交友」において告白している。それはそうと、李白が魚に変身する発想は、李白自身が「白龍魚服」故事を引用した詩（「枯魚過河泣」など）からも、或いは秋成の「夢応の鯉魚」を介し、唐代伝奇「魚服記」若しくは明時代の白話小説「薛録事魚服證仙」からも連想して、閃いたことも考えられよう。「夢応の鯉魚」関係の著作及びその粉本も早くから紹介されていたし、李白の詩を「読むことはもつと早くから好きで好んで註釈書などを見た」という春夫でもあったのだから。

春夫の構想では、水中に落ちた李太白は海上仙人安期生に逢うことになる。この部分について、須田氏論の考察を参照されたい（佐藤春夫と中国文学（下）一七九頁下段）。しかし「魚服記」や「薛録事魚服證仙」における水に住む魚の支配者として登場する水神河伯（若しくは李八百）に照らし合わせてみれば、春夫が或いはこれも参考にしたのではないかと思う。原典においては、病熱に冒され、涼を求めて江畔に佇み、幼少期より水に慣れ親しんだ主人公薛偉は、成人以来官吏としての勤めに忙しく、その樂しみを忘れていたが、いま再び水中での自由な遊泳が可能になった。それを叶えるものとして、河伯（河の神）の使者魚頭人が登場し、その魚形への変身をみとめる詔を薛偉に告げたが、人間界の束縛からの解放に

は試練がある。眼前の「餌」に目が眩み、それを口にすればもとの人間の姿に現形するという。その試練を克服できるか否か、一時的に仮に変身を叶えさせるのであった。こうした人物の設定は春夫の「李太白」になると、海上仙人安期生や水先案内人金龜となり、そして試練というのは、作中の安期生の語り口を借りれば、次のようになる。

此処こそは既に天の川である。九天の上である。安期生はこう言ひながら、一一その場所を自分の目の前に思ひ浮かべるらしく、遠いあたりを見入りながら、大たいこんな風にこの酒の河を辿つて天の川へ遡つて行く道筋を、李太白に精しく教へるのでした。けれども目の前の、それを傾聴して居る魚に気がつく、この小さな魚とその縹渺たる行く手とを思ひ比べて、思はずわがことのやうに嘆息せずには居られませんでした。「口では言へばほんのこれだけのことである。けれども、魚の李太白よお前はその小さな尾と鰭と、それに不老不死の命とを力にして、その無限の涯を行くのであるか……。」

（「李太白」）

人間世界に流謫され、またもや宮廷社会から追い出されてきた李太白を仙人にするための厳しい試練をこれ以上与えれば、人々に夢

を与えるメルヘンとしてはあまりにも残酷であろう。そこで、安期生が次のように言う。

私たちはお前の珍しい才を憐まずに居られない。またお前の仙界に対する切ない憧れにも同情せずには居られない。それ故、実は私たちの仲間でも、赤松子や鬼谷子などとも相談し合つて、もう一度お前を仙界へ呼び返してやらうといふことになつて居た。もしもお前に身の憤みがあつたならば、今しばらくのことで、鶴の背にのせられて仙界へ帰れたのであつたらうに。それをさへも待てずに、お前はもう魚になつた。何といふ可哀さうなことであらう……けれどもここに一つお前にとつて不幸中の幸ともいふべきことがある。それはお前が生前にほんたうに酒を愛した徳によつて、私の酒の河へ墜ちて来たことだ。私はもともととお前がすぎだ。だから、お前が私の領域のなかへ墜ちて来たのを幸に、私はおまえにこの酒の河から天界へ行く道を教へてやらう。

そうして、天界に昇つてゆく金亀と李太白は、「亀」と「魚」の形で、あくまで人間世界に戻ることがなく、西嶽華山の山頂の雲台から丹丘子に見届けられ、とうとう星になるのである。

このように、謫仙人李白の「捉月騎鯨」伝説や「魚服記」などを

巧みに利用し、春夫は、魚に変身させるという換骨奪胎の手法で、作品「李太白」に新鮮味をもたらそうとしたのであろう。しかし「魚服記」や「薛録事」の薛偉は、いったん化魚して、また人間世界に戻り、そこから人間の姿そのまま昇天するのである。中国の民間に盛んに言い伝えられる李白伝承も鯨に乗って昇天するというルーツでなければならない。春夫の「李太白」の場合、あえて魚に化けてそのまま昇天する結末は、中国人の道教的固定概念から遙かに逸している。これは春夫ならではの独自のバリエーション、奇想天外としか言いようがないと思う。

五 魚になった李太白は「金絲魚」であるか、「錦絲魚」であるか？ — 芸術家のレオナルドとミケランゼロ

中国原典「魚服記」における東潭の赤鯉の身に変身する薛偉にせよ、「薛録事魚服證仙」における仙人琴高（東潭の赤鯉）から人間界に流謫された薛偉にせよ、或いは上田秋成の「夢応の鯉魚」における画僧興義にせよ、皆「白龍魚服」故事の源流を忠実に踏まえないがら、「鯉魚」に変身せざるを得ないことに注目したい。

中国の原典は役人であり、秋成の「夢応の鯉魚」は、三井寺の画僧である。こうした貴い身分にある主人公はどんな魚に変身するのかといえば、それはやはり「金色鯉魚」に他ならないだろう。前述した「魚服」語句のもつ意味から考えれば、最もふさわしいのはま

さに「金色鯉魚」であり、ましてや鯉は唐の宗室李氏の「李」と同音で、強いことを象徴している。言い換えれば、天子に代表される龍に変ずることのできる鯉魚は魚類の王様であり、一番吉祥で、高貴の魚類である。また『本草経』注（梁、陶弘景<sup>46</sup>）によれば、「鯉は諸魚の長為り。形既に愛すべく、又能く神変し、乃ち江湖を飛越するに至る。仙人琴高之に乗る所以なり」という。にもかかわらず、「白龍魚服」故事を引用しながらも、佐藤春夫の「李太白」で主人公が変身する魚は、なぜか「金絲魚」となっている。そして、谷崎の「魚の李太白」に登場するのは、「鯛」ではあるが、春夫のそれを「錦絲魚」とする。

春夫の筆になると、前節においても述べたが、中国原典に見られない意外な展開を見せる。つまり李白が水中に落ちて、一旦「金絲魚」に化けて、そのままの姿で水先案内人「金亀」と天界に昇って、星になるのである。

春夫作に語り伝えられたこの結末を土台にして、谷崎潤一郎は「魚の李太白」の構想をたてたのである。妙なことに、両作においては、魚になった李太白は、自分がどんな魚になったのか、相当気にしているようである。春夫は「金亀」の語り口を借りて、

先生のやうな魚は、私もこれまであまり見かけませんでした。けれどもまあ言はゞ、金絲魚のやうなものでせうか。金の筋と、

赤の筋と、緑の筋と、銀の筋とが、赤金の背を豎に縫ふやうに彩つて居ります。それはすつきりとした立派な綺麗なお魚です。

（傍点筆者）

と、つまり魚の李太白を「鯉魚」ではなく「金絲魚」にしようとする。それに対して、谷崎は、お酒の海に落ちた李太白を、「未だにこんな赤い顔をして酔つ拂つて居る」鯛でなければならぬ、しかも次のような魚だ、と主張する。

真赤な縮緬で拵へた、三尺ぐらゐな高さのもので、ちやうどお城鯨鯨のやうに尻尾をピンと空に撥ね上げ、左右の鰭をひろげ、ガラス張りの白い眼玉をぎよんとつて、白木の臺の上に濟まし込んで載つかつて居る。

（傍点原文）

この緋縮緬で拵えたひょうきんな顔をしている鯛に、なんと魂があり、自分こそが生きた魚の李太白で、決して「ありきたりの鯉や鱸や錦絲魚などになる譯がございません。」（傍点筆者）と自己の正当さを宣言する。その背景は、実は春夫のために、「李太白」はまったくの創作であることを弁明しているのであるが、それはさておき、春夫の「李太白」では「金絲魚」となり、特に「錦絲魚」とは

なっていないのが気になる。谷崎の毛筆による訂正や抹消のある「李太白」自筆原稿（新宮市立図書館蔵）を調べてもやはり腑に落ちない。谷崎作の緋縮緬の鯛の言葉によると、春夫が「錦、糸魚に欺まされた」（傍点筆者）、という。

前節において「李謫仙」の粗筋を述べておいたが、天上界から謫仙され、そして都長安から追放された李白の一つの代名詞は、いわゆる「錦衣公子」であるところを想起していただきたい。創作上の必然性から考えて、春夫が敢えて「金糸魚」にしたのだろう。面白いに、李白が「錦衣公子」と呼ばれた由来について、実は「錦袍」にまつある逸話があつて、「李太白」小説創作の際に、春夫もそれをかなり参考にしたのではないかと思うので、ここで紹介しておこう。

初唐の朝廷詩壇に始まったしきたりであるが、遊宴や行幸の場において、皇帝は往々にして詩人達に即興詩を作らせ、その中で最も速く最も優れた詩を作った詩人が、賞品として、天子から「錦袍」という錦の衣を獲得することができる。いわば、宮廷や貴族宴会での必須行事として詩の競作が行われたのである。初出文献資料として、則天武后朝以来の宮廷詩人宋之問の「錦袍」を奪い返す話が最も著名であり、それは次のような挿話である。

武后が竜門に遊んだ時、詩会を行い、そこで群臣たちに命じて詩を作らせ、最初に完成した者に「錦袍」という錦の衣を賜ふことに

した。ある役人の詩がまずできあがり、彼に与えた。しばらくして、宋之問の詩が完成した。詩の表現や内容がともに見事な出来ばえなので、すでに他人に与えた「錦袍」を武后が奪い取って宋之問に改めて下賜した、という。こういった話は、「奪袍」若しくは「奪錦袍」故事として、のちの史書や類書にもしきりに喧伝されている。

それにあやかる類話として、李白にも同じ逸話を見ることが出来る。それは杜甫の「李十二白に寄す二十韻」（寄李十二白二十韻）に見られる話である。ある日、天子が舟あそびをされた時、わざわざ棹をとどめて李白をお待ちになり、他人にくれるはずの「錦袍」を新に奪い返して彼にお授けになった、という。杜甫のこの詩によると、詩的才能において李白の右に出る者は一人もいない、ということ。清時代の『淵鑑類函』（張英撰）になると、このエピソードは、次のように、さらに伝奇風に伝えられている。

ある日、玄宗皇帝が李白を御召しになって、楽章を作らせようとしたが、李白はグデングデンに酔っていた。皇帝が李白に、よい詩ができれば御衣の「錦袍」を与えようとおっしゃった。御言葉を聞くと、天才詩人李白は直ちに起き上がって、筆をとって間もなく詩を書き上げて献上したものの、玄宗皇帝は戯れに「錦袍」を与えてくれない。そこで、李白はその「錦袍」を奪い取ろうとした。満面に笑みを浮かべながらようやく皇帝がそれを賜った。

このように、天子の寵愛を受けた李白の拔群の詩才を伝える逸話



は後世に残り、人々の興味を惹いた。この挿話を載せた『淵鑑類函』とは、清時代に編纂された、いわば百科事典のようなもので、詩賦の用に供されたものである。故事・典故を探索するのに最も重宝で、その名の通り古今類書の淵海ともいうべきものである。前にも述べたように、それが谷崎から春夫に紹介された書物である。芥川の蔵書目録<sup>⑤</sup>にも見られる。春夫が「李太白」を創作するにあたって、衍字趣味を満足させるために、上野図書館へ行って、これを読み耽ったことも事実である。父佐藤豊太郎に宛てた手紙においても春夫はその存在を紹介している。

谷崎氏から聞いて知つたのですが、支那には淵鑑類函といふ百科事典のやうな書物があります。二百巻もある大部の書物で、酒のことでも二巻分あります。よほど貴重で便利な書物です。それで支那文明のことを少しづつ見て居るうちに、私も支那の謳歌者になりさうです。唐物が一番のやうです。

(大正六年五月二日付)<sup>⑥</sup>

いっぞや申上げた淵鑑類函といふ支那の辞書は二十円で買へるさうですから、今度金の入った時に買はうと思つて居ます。

(大正七年八月二日付)

類書『淵鑑類函』に見られる、李白のトレードマークの一種でも

ある「錦袍」逸話は、他に中国の史書や稗史若しくは李白詩集注釈本などにも紹介されており、調べればいくらでも例が出てくるので、春夫はいずれかを見て、その「錦袍」のモチーフを自作に取り入れ、魚になった李太白を「金絲魚」にしたのであろう。李白の「錦袍」の話については別稿で詳しく述べた(第26回国際日本文学研究集会議録二〇〇二・十二)ので、「錦袍」の話はここに筆を擱く。

からかうかのように、春夫作のそれをわざと「錦、絲魚」に訂正し、魚になった李太白を「鯛」とする谷崎の心理は、宋之問や李白の「錦袍」を奪い返す話と併せて考えてみれば、推測するに難くない。谷崎は「佐藤春夫君と私と」<sup>⑦</sup>の中で、当時の春夫のことを、次のように回想している。

その実同君は案外早くからスバルなどへ時々寄稿して居たので、必ずしも新進作家ではないのである。同君が比較的古顔であるにも拘らず、長い間文壇から認められなかったのは、年が若過ぎたと云ふ事以外に色々の原因があつたに違ひない。同君は非常におしやべりでオッチョコチョイらしい所もあつたし、極めて無邪気な無遠慮な態度で先輩後輩の区別なく議論を吹かけたり冷やかしたりする癖があるから、その為に或る一部から誤解を招いた事もあつたらうかと推測される。嘗て、同君が今日の如く評判にならない時分に、私が同君のある原稿を或る雑



誌社へ推挙した折、その雑誌の記者が迷惑らしい顔つきをして「折角ですが佐藤君の物は御免を蒙ります。僕は載せても差支へないと思つて居ますが、あんな人の原稿を貰つてはならないと云ふ意見が多くつて困るのです。」と云ふ話であつた。(中略)その後佐藤君に会つて、君はそれほど文壇の或る一部から恨みを買ふ覚えがあるのかと問ひ質して見たら、同君も少し悲観したやうな様子で、「僕にもどう云ふ訳が分らないんだけど、方々で僕を憎んで居る人間があるらしいんだよ。そのために僕はいつ迄立つても文壇へ出られないやうな気がして居る。」かう言つてシヨゲ返つて居た。同君の如き優れた天分のある芸術家が、何故斯くまで圧迫されて居るのか怪しからん訳だと私は思つた。さう云ふ事情の爲めに一時は創作をする張り合ひもなくなつて、たゞぐうたらに怠けて居る時代もあつたらしかつた。

幸いなことに、谷崎との交友が、春夫が作家として世に出ることを容易にした。この後常に春夫は谷崎や芥川と並び称され、或いは比較されて創作生活を送ることになった。「詩文半世紀」において、春夫は当時の自分の心境をこう述べている。

鷗外、漱石が自然主義と風馬牛に活動しているところへ、荷風が出現して反自然主義の風潮を生じたが、つづいて潤一郎、

直哉、実篤など「白樺」の諸公のあとに「新思潮」の龍之介、正雄、寛などが続出して、その刺戟でか自然主義の諸家も最後の光焰に似た活動をする。他の部門のことは知らず、芸術界では大正の時代は必ずしも不振ではあるまい。

龍之介や正雄のような同年輩の作家が出始めて、わたくしは多少はあせらないでもなかったが、それでもまだゆつたりと画筆を取っている気はあつた。何もあせることはない。自信のある作品さえできれば、長江先生は必ず、世に出して下さるとわたくしはそう信じていた。(中略)わたくしは別にあせてはいなかったが、もうそろそろ兵糧の心配をしなければならぬ時期に達していた。もうすぐ二十五になつて糧道は絶えるのだから。(中略)芥川龍之介や久米正雄、菊池寛などの同人がみなそれぞれに活動しはじめて、特に芥川が旭日の勢いを見せはじめたところ、同じく東京帝国大学の文科にいて「新思潮」の仲間とは別の系統の一味もきつと技癢(ぎよく)腕(うで)のむずがゆき」と焦心(きせき)のあせり」とに堪えなかつたに違いない。(中略)英文科にいた江口渙と久保勘三郎と仏文にいた木村幹らとが語らい合つて、同人誌「星座」というのを企てたものであつた。

このように、彼らは明治ごろに生まれたほぼ同世代者の作家たちで、自ら一群の同行者のな集團をなし、互いにその才を競つたこと

も不思議ではない。大正十年前に作家となった人々によって、明治時代を生きた作家たちとは全く異なる作家群が形成されたのである。それらの多彩な作家群の中で、詩を書き、訳詩もし、警句に満ちたエッセイを書き、また小説も書く点で、春夫がずば抜けて、一種の多芸多能の天才作家であり、しばしば東大系の才人の芥川とも比較された。芥川も他の同時代者には感じなかった競争意識を春夫に対しては抱いていたようである。

二人はいいライバル同士だったが、文壇的には芥川の方が先に有名になった。(中略)二人の間の競争意識は、かなり激しかったように思う。

と、谷崎は語っている。

芥川は大正五年の二月号『新思潮』に書いた「鼻」が夏目漱石に深い感銘を与え、その並々ならぬ推賞によって、九月号『新小説』には「芋粥」を、十月号『中央公論』には「手巾」を、また同月号『新小説』には「煙管」をと、相次いで力作を発表し、新進作家としては前例のないほどの速度で、颯爽として文壇に出たのである。その刺激を受けた久保や江口らが春夫を誘い、同人誌『星座』を発刊したのである。「その時のわたくしにとっては、僅か五円という同人費も毎月はちと重荷と感じられた。毎月女房や自分の衣類を質

に置いて口ずぎをしていたわたくしは、その利子に追い立てられているうえ、更に五円は事実苦しかったのである。」という状況だった春夫は、同人費の工面が難しい事情をありのまま江口に打ち明ける。結局、原稿をなるべく書いてほしいということで、同人費免除で同人に加わった。創刊号の表紙を描いたり、「西班牙家の犬」などを発表したのは前述した通りである。

春夫の天才的才能について、谷崎は「佐藤春夫君と私と」において、

佐藤は理解の方面が実に広く、本職の詩では和歌、漢詩、英詩などまで鑑賞し、小説でも日本、中国の古典から外国の新しものまで、よく味読していた。そして、文学を語ることが大好きで、せっかくの小説の材料を、自分でさきざきしゃべってしまうのだった。(中略)芥川も一緒に話を聞いたが、芥川が「君は不思議なことを考える人だね」と述懐したのを覚えている。私は佐藤と全く反対のタイプで、小説の素材を書く前にしゃべってしまうと、もうとても書く気になれない。ところが、佐藤の場合は、作品よりも話の方がおもしろいくらいだった。「君、そんなにみんなしゃべってしまうと、書けなくなるよ」と私は心配のあまり忠告するのだが、佐藤は話すほど作品がうまくまとまるようだった。

と賞賛している。芥川も春夫の初期の作品を読み、手紙を書いてくれた。『星座』も欠かさずに読んでくれた。春夫と芥川との交友関係は、江口を中間にして始まる。芥川の自殺後、春夫は次のように回想している。

自分はその頃文学上の自信をなくし方向を見失つてゐた。

(中略) 自分は彼の「新思潮」につけた作品を二三読んで、

此処に芸術上の血族が一人あることを発見して喜んだが、不満もなか／＼無いではなかつた。(中略) 自分は芥川の作品を全部読んでそれを批評すると同時に、自分の抱いてゐる文学論を披歴して見たいといふ気持ちがあつた。このことを当時の友人江口に話すと江口は彼が持つてゐた新思潮の一揃ひを自分に貸してくれた。自分は一読して自分の意見の一端を江口に述べた。江口はこの以前から芥川と交友があつたから自分のことを彼に伝へたものと見える。自分は或る日芥川から手紙を貰つた。

(「芥川龍之介を憶ふ」)

そして、春夫と文壇の争友ともいわれる芥川との間には、次のような面白い挿話がある。

芥川は或る時から云つて笑つたことがある。

「おい、君知つてゐるか、君と僕とは高村光太郎に依つて、レオナルドとミケランゼロに比べられてゐるが、愉快だね。——いやかうなんだ、或る男が高村氏に、佐藤と芥川とはなぜあ仲が悪いんだらうと、云ふと、高村氏はおもむろに、一体昔から芸術家と云ふものは、レオナルドとミケランゼロにしても……と云ひ出したと云ふんだよ。レオナルドとミケランゼロを持ち出した所が高村氏らしいね。」

(「芥川龍之介を憶ふ」)

(傍点筆者)

これについて、春夫はまた次のように述べつつある。

自分が或出来事で谷崎とも交友が絶え家庭も破壊して了つて東京の市中を半ば放浪するやうに生活してゐた頃、芥川は瀧田樗陰に伝言をして、「佐藤は僕が佐藤の好まないやうな沢山の友達を持つてゐたりなどするものだから何にかと僕まで誤解して僕にもいい感じはしないであるらしいのだが、その点よく言つて貰ひ度い。僕は恐らく何人よりも佐藤の才能を買つてゐるつもりなのだから」と云ふ意味を、瀧田が自分に伝へてくれた。(中略) 実際自分と彼とは一面に於いて非常な親愛の感情を持

つてゐ乍ら、他の一面ではどうしても融合出来ないやうな何物かがあつた。ひよつとするとこれは吾々の二人の中に余り共通し過ぎる点があつたからかも知れない。

〔芥川龍之介を憶ふ〕

見てきたように、春夫が魚の李太白を「金絲魚」にした背景には、実は芥川に対するライバル意識が働いて、「錦袍」をまとった謫仙人李白に当時の自分の心境を託したかったのではないかと思う。「芥川龍之介を憶ふ」の一文において、春夫はこう吐露している。

また自分としては最も不遇な時代に幸福な羨望すべき同輩として目に映じた彼に対する競争的心理が、無意識であつただけに一層露骨に現れることがあつたに相違ないと今になつて反省されるのである。

芥川のための「羅生門」出版記念会は、『星座』の代表人として発起人の一人でもあつた春夫にとっては、心のこもつた会合ではあるが、次のような感慨も抱かせた。

見すばらしい姿で末席につらなつたわたくしは「わがためのこんな会は果たしていつあるやら無いやら」と思ったものであ

つた。

〔詩文半世紀〕

春夫は鋭い審美眼を持ち、文学についての考え方は、同時代者たちに対して常に指導的役割を果たしていた。この点について、谷崎は「私と佐藤との関係では、私の方が先輩なので、儀礼的にも兄貴扱いしてくれた。しかし、文学上の影響という点では、逆に私の方が影響されたところが多い。」と話しているが、谷崎もまた当時の春夫に対して一種のライバル意識を抱いていたに違いない。明らかに春夫の「李太白」と違う作風を表す谷崎の「魚の李太白」も洒落で、春夫を揶揄し、原作以上に文才的自負心を示そうとしていることがまず看取できるのではないか。

宋之問や李白の「錦袍」逸話を踏まえて、その「支那趣味」を熟練にかつアイロニカルで文人的遊戯によって見事に作中に表現し得ているのは、小説家として駆出しのまだうぶな春夫よりも、さすが大家になっている谷崎の方が一枚上手であると言わざるを得ないだろう。

## 結 語

繰り返すことになるが、便宜上、佐藤春夫の晩年の回想文「詩文半世紀」を引用しながら、「あのころの私と交友」などでも彼の文

章観を吐露しているように、この辺で煩わしさを避けないで、春夫の「李太白」創作の際の背景を再びまとめたい。

明治末年から年少にして『スバル』を中心に詩や歌を発表していた春夫は、師事していた生田長江の仲介によって、雑誌『黒潮』六月号に「病める薔薇」（大正六）を発表したが、その当時はまだそれほど文壇から注目はされなかった。それまで芥川龍之介が褒めた「円光」（我等）大正三・七）などもあったが、文壇に確固たる位置を占めるにはまだ至らなかった。一方、芥川が「鼻」（大正五年）で華々しくデビューしたのに刺激を受けた久保勘三郎らのグループが同人雑誌『星座』（大正六・一創刊）を企画し、春夫も同人江口渙に誘われたのである。「星座」という名は、春夫がつけた。同人の「ことば」として、扉に書きこんだのは誰であるか、定かではないが、春夫くさいところもくはない。

星座の星は集まつて居ることに際立つた意味があらうとは思つて居ない。吾々は集まつて居ることによつて、箇性<sup>（イグナル）</sup>を矯めあはうとはしない。併し箇性の奥に於ては同じ力に動かされて居るに違いない。それが星を一つの星座に集めたものであらう。吾々はその力に処ることによつて各自の光を放ちながら進み度いと願ふ。

無名作家時代の春夫は、単に小説文体の模索に腐心していただけではなく、大正二、三年頃、真剣に画家になろうかと思つて、ひたすら芸術によって自我を表現する道を求めていた。自分の資質に関する自信ははっきり持っていたが、芸術家の卵としての不安定な生活に疲れ、経済的にも苦しかった。そこで春夫は東京脱出の計算をした。郊外の安い土地を買つて実家新宮あたりの高い地価に準ずる価格を報告し、家から出してもらう金の差額を貯え、二、三年じっくり生活しながら、その間に自分の文学及び文壇地位を確立しようというのである。春夫は「学校をやめた時も、画を描き出しても、同棲生活をはじめたと知つても」小言らしい小言も言わない寛大な家庭に対して、自分もそれにこたえたいと思つていた、という。そして、女優と同棲したときに「わが子が他家の娘を餓死させるのを黙つて見ては居られないから」という理由で、学資のつもりで金は送るが、二十五までには一人立ちせよと父に言われ、春夫もその決心をしていた。

ところが、その二十五歳が近づくので、いよいよ生活できなくなる危険が迫つたし、芥川らが世に出て多少あせらないでもなかったが、「苦肉の密計」で母の庇護が最後の頼りになるだろうと思つた春夫にとって、実際は「背水の陣」でもあったわけである。文学を酒色の代わりに「消閑の具として遊戯し」、しかも「遊戯<sup>（ユグ）</sup>三昧の境」に達せられる遊蕩生活、こういったような文士生活は、到底春夫に

は果たせそうもなかった。

わたくしは、はじめ結晶した文体を求めながらも、国語の性質はわたくしの考えたような、ドライでかつちりした文字の結晶は得られそうもないと思っているところへ、現れたのが武者小路の自由画のような文体であった。思いあぐんでいたわたくしは、終いに結晶体のスタイルはあきらめて、この流動体のスタイルに転向してしまった。(中略)しかし二十五歳までに出世を書かなければならないと、自ら誓っていたわたくしは、じっくり腰を据えてわが文体を探求しているゆとりもなかった。そうしてわたくしのはじめた散文は最初の志と違って、しゃべるように書くスタイルにまで展開して行った。

#### 〔詩文半世紀〕

「満を持して敵に対し、首を賭けて壁を抱いている身が、空しく餓死することは決して本望ではない」春夫ではあったが、幸いなことに、谷崎潤一郎と知り合い、「田園の憂鬱」の構想を語って励まされた。それを発表し、漸く文壇に注目され、田山花袋その他の賛辞を受け、文壇に踏み出すこととなる。その「田園の憂鬱」を書き直すために帰郷した間、怠惰なデカダン生活の倦怠から逃れようとしたり、書いてみた小説がこの「李太白」である。この時期の春夫は、

そのような幻想と現実の入り乱れるところに身を置いて、読者に幻想のリアリティを知らしめることに熱中していた。これは春夫の前期の作風の特徴をも窺わせる。

蒲池歙一氏が春夫の中国文学への態度を、次のように鋭く批評している。<sup>②</sup>

あくまでディレッタントの自由さであり、その翻訳に当っては、いかなるテキストに対しても、その翻訳に当っては十分にむしろ十二分に詩人としての自己の自由を保留してゐると云ふことである。そこに専門学者が絶えて持たなくなった所の創造性が強く在るのであって、この創造性は正しく行使すれば、最上の翻訳となり、一步誤れば原文を作詩のヒントに過ぎないものとする恐れが十分あるものである。

小説「李太白」の創作にあたって同じ点が指摘できるのではないか。「李太白」の前半は、李白伝奇、例えば白話小説「李謫仙」を借りて「支那小説の翻訳」と思わせ誤り伝えられがちだが、その他「夢窓の鯉魚」若しくはその中国原典「魚服記」などを介して創作のヒントを得た上、李白の「錦袍」エピソードを参考にしたことも充分確認できよう。

春夫は、諸原典からそれぞれのエキスを抽出し、脳裏を過ぎった

ヒラメキとともに、自作に織り込んでいきながら、いわば引用と想像力を基盤にしてブリコラージュの作品として再創作していくのが得意であった。この点において、小泉八雲の再話文学<sup>(8)</sup>と極めて類似していると指摘すれば、「李太白」をはじめその後の創作的翻訳作品も評価できよう。しかし、『万朝報』の批評家してみれば、こういったものは、巧妙練達な文章でなければ、作品の隙間から借り物のタネがどしどし顔を出すはずだ、というふうにしかな「李太白」を評価していない。

が、春夫は謫仙人李白に惹かれた芸術観を、詩情的かつ散文的小説風に美しく見せようと努力した。「李太白」後半の創作における真価といえ、<sup>(9)</sup>「錦袍」逸話を踏まえながらの自分を託した李白詩人像、愛情を込めた新たな生命を注ぎ込んだ「金亀」に、天才的な筆をふるうことができ、それらに対する新解釈を空想的世界の展開のなかに託しているところにこそあるのではなからうか。「新技巧派」としか評価されていなかった新人小説家佐藤春夫の「支那趣味」原風景をつきとめれば、自分はまだ文壇に出世できていないという焦燥感、また自らの天分に対する悩みを抱えた当時の姿、そのような「支那趣味愛好者」としての姿を理解することができよう。

## 注

(1) テクスチャルな知識に基づく本格的な中国文学研究者と違い、大正文人の中で、谷崎潤一郎をはじめ、中国に関心が高い作家が、文学という場で、いわゆる「支那趣味」或いは「中国文物鼎」を文人遊戯という形で作品に見せるのを、「支那趣味愛好者」という(學燈社『別冊國文學』No.54「谷崎潤一郎必携」三六頁「支那趣味」三八頁「エキゾチズム」項目参照、執筆者は西原大輔氏、二〇〇一・十一・十)。佐藤春夫もその代表的な一人である。なお、春夫は「からもの因縁―支那雜記の序として」(『支那雜記』、大道書房、一九四一・十・十八)において、自分を「支那趣味愛好者の最後の一人」と自認している。

(2) この回想文には二種の草稿が存在し、一方の標題は「あのこと」、副題は「五十年前の原稿ガラに對して」。もう一方の標題は「拙作「李太白」を削除して「若き日の作品」と記され、副題は「旧稿李太白の原稿がら」と「旧作李太白の原稿がらを見て」の二つが並記されている。しかし『文芸朝日』第一卷第八号(一九六二・十二・一)に掲載した時、標題は「あのことの私と交友」となり、副題は「中天の満月を顔にして、巨大な女人を幻想」と「原稿を持込んで稿料まで貰ってくれた谷崎」の二行並記となっている。

(3) 大正八(一九一九)年六月一日発行の雑誌『新潮』第三十卷第六号に「人の印象(二十九)―佐藤春夫氏の印象」の大見出しのもとに「何よりも先に詩人」の題で掲載され、のち初の随筆集「点心」(金星堂、一九二一・五)に、題を「佐藤春夫氏の事」と改めて収められた。

(4) 「李太白」一文の注解は、講談社刊『佐藤春夫全集』第六卷

(一) 九六七・九・二十五)において、佐藤春夫研究家牛山百合子氏によって初めて試みられた。氏は佐藤春夫の「あのころの私と交友」回想文を掲げる他、この回想文に言及された『淵鑑類函』から佐藤春夫が参照したと思われる酒の名の出所なども明示している。

(5) 大正十一(一九二二)年十月一日・十一月一日発行の『改造』第四巻第十号・十一号「創作」欄に、佐藤春夫の「百花村物語」が発表され、初出前半の末尾には、次のような断り書きがある。

この話は一たい「今古奇観」巻第八なので、私にはそれがちよつとしたメルヘンの興味で読めるのである。(中略)しかし別に加へるべき創意もないし、さうしたいとも思はなかつたので、気軽になるべく原文に近い気持でこれを書き初めた。(中略)このやうな話でももう三年ほど以前であつたら私は相当の芸術的情熱をもつて書き上げることが出来たらうにと思ふ。つまり自分でも気がつかないうちに私の空想趣味時代も去つたのであらう。

(傍点筆者)

「空想趣味時代」とは即ち作者の「田園の憂鬱」創作時代と考えられよう。

(6) 前掲「あのころの私と交友」

(7) 注(5)を参照。

(8) 佐藤春夫『玉簪花』(新潮社、一九二三・八・五)

(9) 佐藤春夫『日本児童文庫 支那童話集』(アルス、一九二九・一、非売品)

(10) 前掲「あのころの私と交友」

(11) 佐藤春夫「西班牙犬の家」(「星座」創刊号、一九一七・一)

(12) 佐藤春夫「田園の憂鬱」(「中外」、一九一八・九)

(13) 前掲「あのころの私と交友」

(14) 「発行の辭」として両書の巻頭に載せたのは全く同じ内容ではあるが、而立社刊『李太白』のは「歴史物傑作選集に就いて」となつて、荻原星文館刊『酒と酒』のは「序」となっている。

(15) 佐藤春夫「仙女の庭」(富山房、一九六一・十一・十)の巻頭に載せた「この本を読む手だすけに」訳著者から読者へ贈ることば」を参照。

(16) 佐藤春夫「からの因縁—支那雜記の序として—」参照。これは、大道書房刊『支那雜記』(一九四一・十)に、副題が示すとおり、序を兼ねて収録されたものである。

(17) 佐藤春夫「芥川龍之介を憶ふ」(『改造』第十巻第七号、一九二八・七)

(18) 前掲「からの因縁—支那雜記の序として—」

(19) 佐藤春夫「自作に就て年少の読者のために」(『文章俱樂部』第十三巻第九号、一九二八・九・一)

(20) 表1「佐藤春夫の「李太白」言及」参照。

(21) 外国人の書いた中国文学史は最も早く出た物に、日本・古城貞吉の『支那文学史』(富山房、一八九七・五・三一)、イギリス・ジャイルズ(Herbert Allen Giles)の『中国文学史』(一九〇一、ロンドン)、ドイツ・グルーベ(W. Grube)の『中国文学史』(一九〇一、ライプツィヒ)などがある。中国人の書いた物は、林伝甲『中国文学史』(一九〇四)、謝无量『中国大文学史』(一九一八・十、



中華書局) などがある。林著は、小説を排斥し、謝著は、全書六十三章のうち、小説に言及したのは僅か四つの章か節しかなかった。

日本・笹川種郎の『支那小説戯曲小史』(東華堂、一八九七・六・十) 及び『支那文学史』(帝国百科全書第九編、博文堂、一八九八) も確認できる。なお、郭廷礼論(19世紀末20世紀初東西洋《中国文学史》的撰写、『中華読書報』二〇〇一・九・二六、光明日報社)では、ジャイルズ著の出版年を古城貞吉著のと同じ一八九七年とする。また郭論は、露西亞のB.I. Backlund(一八一八—一九〇〇)著の『中国文学略史綱要』を古城貞吉著より出版が早いと指摘し、それは十九世紀八〇年代初頭の出版とされる。『綱要』では『聊齋志異』等白話小説の存在をかなり評価。

(22) 一九二三年十二月、魯迅の『中国小説史略』上冊が北京大学第一学院の新潮社により出版され、初版本の刊行の直後、当時、在北京の日本人が発行していた日本語週刊誌『北京週報』九十四号、一九二三・一二・二三に紹介記事(魯迅の『中国小説史略』)が載った。翌年六月、『中国小説史略』下冊が同じく新潮社により出版された。一九二五年に入ると、『中国小説史略』上下冊が北京の北新書局社により一冊にまとめて出版された。一九三五年第十版の時、さらに個々の改訂をし、「題記」において、塩谷氏の『三言』についての論文に初めて言及。

(23) 大正十五(一九二六)年七月二十九日発行の『支那文学大観』第十一卷「今古奇観」(支那文学大観刊行会、佐々木久編著)において、文学博士塩谷温は、「今古奇観の参考書目」を掲載し、『今古奇観』の小説の出処を明らかにした。また同書に塩谷氏が絶賛する

佐藤春夫訳の「願事叶ふ」「花つくりの翁」が見られる。同年六月二十六日、塩谷氏は斯文会で講演を行い、七月に、同じ講演の要旨をさらに要約したものを「明代の通俗短篇小説」と題して、『改造』夏期増刊号(八巻八号)の「現代支那号」に特別附録として発表した。この現代中国の特集号は、実に貴重な資料としての価値がある。執筆者の顔ぶれは錚々たるメンバーであり、そのうえすべて日本語によるものであることがその最たる特徴である。佐藤春夫を含め、当時の中日両国の文筆家・作家による文壇・論壇の交歓の様相を知ることでもできよう。翌月九日、豫塵を通して、塩谷氏は魯迅に手紙とその書目を贈った。さらに塩谷氏は斯文会でした講演を活字化したものを、「明の小説『三言』に就て」と題して、『斯文』第八編第五・六・七号(一九二六・八・十)に三回連載をし、十二月、「宋明通俗小説流伝表」を『斯文』第八編第九号の末尾に附す。

(24) 佐藤春夫が「李太白」執筆の際に中国の諸歴史書や王琦注本『李太白全集』を参考にしたことは、山敷和男氏論「佐藤春夫と謫仙人とに関する一考察」(早稲田大学中国古典研究会『中国古典研究』第十三号、一九六五・一二・七四頁)によって、既に指摘された通りであるが、李白詩集注釈本に関しては、王琦注本だけでなく、近藤元粹著『李太白詩醇』(青木嵩山堂、一九〇二)及び森槐南著『李詩講義』(文会堂、一九一三)なども参考にしたのではないかと思う。

(25) 『朝野僉載』(唐・張鷟撰) 卷三に見られるこの記述は次のようになる。

上元年中、令九品以上配刀礪等袋、彩帨為魚形、結帛作之。

取魚之象、強之兆也。至天后朝乃絶。景雲之後又復前、結白魚為餅。

また、『説郛』（明・陶宗儀撰、明・郁文博、清・陶珽增補）卷二に、次のような記述も見られる。

漢發兵用銅虎符。及唐初、為銀兔符、以兔子為符瑞故也。又以鯉魚為符瑞、遂為銅魚符以珮之。至偽周、武姓也、玄武、龜也、又以銅為龜符。

(26) 『唐才子伝』（元・辛文房）の「李白伝」に伝えられている、金亀を酒にかけて賀知章と李白が楽しんだ話を、佐藤春夫は「李太白」に取り入れた、と前掲山敷氏論「佐藤春夫と謫仙人とに関する一考察」は指摘しているが、須田千里氏論「佐藤春夫と中国文学（下）」（『文学』第三卷第三号、岩波書店、二〇〇二・五・六、一八〇頁）は、「金亀」を解いたのは李白ではなく、賀知章であると指摘。

(27) 前掲佐藤春夫「自作に就て年少の読者のために」参照。

(28) 「遊蕩児」の訳者に寄せて少し許りワイルドを論ず」（『スバル』第五卷第六号、一九一三・六）

(29) これは、昭和二十七年（一九五二年）、「作家に聴く」第八回」として、『文学』第二十卷第八号（八・十）に掲載されたもので、標題は「佐藤春夫」とある。

(30) 佐藤春夫「田園の憂鬱」を公にするまで」（『文章俱樂部』第十一卷第六号、一九二六・六・一）参照。

(31) 横山春一編『改造目次総覧』上巻（新約書房、一九六六・十二・十二）一〇頁

(32) 大正七（一九一八）年二月号『中央文学』（春陽堂）のアンケート

(33) 佐藤春夫「嬉しかったこと苦しかったこと」（『文章俱樂部』第五卷第八号、一九二〇・八・一）

(34) 前掲佐藤春夫「芥川龍之介を憶ふ」

(35) 目次では「文藝漫語」となっている。

(36) 実際は李白が「白龍魚服」故事を度々詩に歌っているのがわかる。「枯魚過河泣」の他に、例えば「遠別離」、「流夜郎半道承恩放還兼欣剋復之美書懷示息秀才」詩などはそうである。

(37) 諸橋轍次編『大漢和辞典』巻八（大修館書店、一九六七・十・一、三八頁）を参照。

(38) 元禄十一（一六九八）年に刊行されていた林羅山の『怪談全書』巻二には、すでに『古今説海』の「魚服記」の翻訳が「魚服」と題して収められていた。『怪談全書』の異本の一つである『漢考怪談』巻之三（俳人松月堂不角、享保年間あたり刊行）の十一丁オから十五丁オにわたり、『古今説海』「魚服記」の訳もある。そして『雨月物語』「夢応の鯉魚」の原拠について、最も早く説を出したのは、天明三（一七八三）年の『近古奇談 諸越の吉野』の題詞に見える。同書に「雨月物語之夢應鯉魚的話、是向醒世恒言中譯來的」とある。明治四十三（一九一〇）年七月、岩橋小弥太氏が、「夢応の鯉魚」と先行文芸との関係を論じて『御前御伽婢子』巻六「五条通にて水無瀬文治といへるもの死して魚に化せし事」（都の錦、元禄十五（一七〇二）年刊）の存在を示す（国学院大学『国学院雑誌』第一六卷第七号「雨月物語攷」）。紫影藤井乙男博士が、「支那小説の翻訳」（『芸文』第三卷第九号、一九一一・九）で、初めて

「魚服記」を「夢底の鯉魚」の粉本と認定した。

- (39) 『日本雜記』(Lafcadio Hearn, "A Japanese Miscellany", Boston: Little, Brown and Co., 1901.10) 第一部再話物語"Strange Stories"の"The Story of Kogi the Priest".

(40) 佐藤春夫「あさましや漫筆—上田秋成の諸短篇を論ず—」(『世紀』、一九二四・十二) 参照。

(41) 佐藤春夫は、一九三八年八月、『中央公論』(第五十三卷第八号)に「雨月物語清涼抄」を掲載。後に『上田秋成』(桃源社、昭和三十九・八)に収録。

(42) 佐藤春夫は、一九三四年八月、『上田秋成を語る—わが秋成論の序説—』を『新潮』(第三十一卷第八号)に掲載。後に『上田秋成』(桃源社、昭和三十九・八)に収録。同年十月、『早稲田文学』(第一巻第五号)に「再び上田秋成を語る—その人生観、詩歌論など—」を掲載。後に『上田秋成』に収録。「上田秋成」は、一九三八年一月、『文藝春秋』(第十六巻第一号)に「一」から「六」を、同年二月一日発行の同誌(第十六巻第二号)に「七」から「十五」を掲載。後に『上田秋成』に収録。

(43) 注(38) 参照。

(44) 前掲佐藤春夫「からもの因縁」

(45) この部分は、前掲山敷氏論「佐藤春夫と謫仙人とに關する一考察」においては、李白の「西嶽雲台歌送丹丘子詩」にヒントを得た、とすでに指摘されている。

(46) 明・李時珍『本草綱目』卷四十四「鯉魚」集解引。

(47) 宋之問の「奪袍」故事は、文献資料としては、唐の劉餗が著し

た『隋唐佳話』に初めて見られる。のち歴史書や類書などにも頻繁に記載されているので、一般に知れ渡るようになったと思われる。

(48) 杜甫のこの詩から本論と關係の有る部分のみ次のように引用する。

昔年有狂客、號爾謫仙人、筆落驚風雨、詩成泣鬼神、聲明從此大、汨沒一朝伸、文采承殊渥、流傳必絕倫、龍舟移棹晚、獸錦奪袍新。

(49) この伝奇は『淵鑑類函』卷三百七十一「服飾部二、袍三奪貂」において次のように語られている。

唐明皇召李白作樂章、白佯醉不起、帝曰賦成以貂豹錦袍與卿、白起授筆而成、帝故戲之不與、白奪其袍、帝笑而與之。杜甫嘗贈詩曰、筆落驚風雨、詩成泣鬼神、龍舟移棹晚、獸錦奪袍新。

(50) 日本近代文学館所蔵資料目録2『芥川龍之介文庫目録』(日本近代文学館、一九七七・七・一)「和漢書」部に、『淵鑑類函』(巻一〜四百五十、四十八冊、光緒十三〜一八八七)年石印)の名が確認できる(二八頁)。

(51) 臨川書店版『定本佐藤春夫全集』第三十六卷(二〇〇一・六・十)の書簡集(二七頁)は、この父親宛の手紙を大正六年だと推測しているが、同版の年譜によれば、春夫と谷崎の知り合った年月は大正六年六月とし、また「李太白」の執筆時期及び発表年を考えて、大正六年五月二日付はやや矛盾な点があると思う。

(52) 谷崎潤一郎「佐藤春夫君と私と」(『新潮』三十巻六号、一九一九・六)

(53) 佐藤春夫は「詩文半世紀」を一九六三(昭和三十八)年一月四

日から五月一日まで七十五回にわたって『読売新聞』（夕刊）に連載。

(54) 谷崎潤一郎「佐藤春夫と芥川龍之介」（一九六四年五月十三日付「毎日新聞」夕刊に掲載）

(55) 前掲「詩文半世紀」

(56) 前掲「佐藤春夫と芥川龍之介」

(57) 蒲池敏一「佐藤春夫と中国詩」（『國文學解釈と教材の研究』六卷十四号、一九六一・十一）参照。

(58) 平井呈一氏は『小泉八雲作品集』第九卷（恒文社、一九六四・十二・二十）中の『日本雜記』の解説（『八雲と再話文学』、六三八頁）で、「文字に書かれた原典に基づいてretellしたもの」と言い、「八雲独特の作品形式あるいは手法を、かりにわたしがそう名づけたもの」と語っているが、小学館の『日本国語大辞典』第五卷（第二版、二〇〇一・五・二十、一三五〇頁）は、「伝承的な昔話や伝説を、（中略）現代的な感覚や用語で文学的に表現したもの。また、その作業」と定義している。